



令和 6 年度指定
WWL(ワールド・ワイド・ラーニング)
コンソーシアム構築支援事業

研究開発実施報告書
第 1 年次



茨城県立勝田中等教育学校

巻 頭 言

茨城県教育庁学校教育部高校教育課

課長 深澤 美紀代

令和6年度茨城県WWLコンソーシアム構築支援事業報告書の刊行にあたり、日頃より本事業の推進にご尽力いただいている拠点校及び連携校の教職員の皆様、事業協働機関の皆様及び、関係者の皆様に心より感謝申し上げます。

本県は今年度、「茨城県を未来型ダイバーシティ県にするための教育の推進」をテーマとし、本事業に初めて採択されました。県立勝田中等教育学校を拠点校として、県立中高一貫教育校13校と国内外の大学や企業等が協働し、高校生に高度な学びの機会を提供しています。今年度は、多文化共生を学ぶためのダイバーシティ研修と茨城県WWL高校生フォーラムを実施しました。参加者の感想からは、新たな興味が芽生え、視野が広がるなど、次の学びへとつながる様子が見受けられました。来年度はさらに、大学での先取り履修や海外大学体験研修なども実施する予定です。

学校を離れ、企業や大学で学ぶことは大きな刺激となりますが、何よりも意義深いのは、他校や海外で学ぶ同世代の生徒たちとの交流ではないでしょうか。多様な背景をもつ仲間と出会い、共に学ぶことで、新たな価値観や考え方を得ることができます。

先行きの見えないVUCAの時代においては、答えのない課題に対して他者と協働し、解決策を見出していく力が求められます。現在学んでいる高校生が社会で活躍する頃には、協働する相手と国籍や言語、宗教などを共有していることのほうが少ないかもしれません。そのような環境の中で、違いを理解し、尊重しながら、より良い解決策を見出し、新たな価値を創造する力が必要となります。本事業では、そのための機会を提供し、生徒の皆さんに実際に体験してもらいます。時には難しさを感じることもあるでしょうが、新たな気づきを得る喜びや学びの楽しさを大いに感じてほしいと思います。

本報告書では、上述の事業に加え、拠点校が進めるグローバル人材育成のためのさまざまな取組、例えばグローバルゼミや防災運動会、留学生の派遣や受入れなどについても紹介しています。本報告書を通じて、本事業への興味を深めていただくとともに、本県の国際理解教育のさらなる発展に向けて、より一層のご協力を賜れますと幸いです。

次年度以降も、これまでの取組を一層充実・発展させてまいります。関係する皆様には、引き続きご支援とご協力を賜りますよう、お願い申し上げます。

茨城県 WWL 拠点校からのご挨拶

茨城県立勝田中等教育学校

校長 下山田芳子

日頃より本校の教育活動に多大なご支援とご協力を賜っております関係の皆様には、この場をお借りして心より御礼申し上げます。

茨城県立勝田中等教育学校は、茨城県では3番目に開校する県立中等教育学校として、そしてひたちなか市では唯一の中高一貫教育校として、令和3年4月に開校しました。常陸那珂港などグローバル都市としてのインフラ機能を備え、国際港湾都市として成長を続けるひたちなか市から、「地域と世界をつないで地域創生に貢献するグローバルリーダー」を輩出するために、開校からの6年間、英語教育とグローバル教育を学びの両輪として探究活動を展開する学校づくりを進めてまいりました。その成果が認められ、本年度より茨城県初のワールド・ワイド・ラーニング(WWL)コンソーシアム構築支援事業の拠点校に指定されました。

本校では、令和6年度から令和8年度の3年間にわたり、「茨城県を未来型ダイバーシティ県にする教育の推進」をテーマに、国内外の大学や高校などと連携した高度な学びを展開していきます。初年度の令和6年度は、茨城大学グローバルエンゲージメントセンターと連携し、県内に住む外国人との共生をめぐる課題と解決策を探究する中で、解決策の一環として生徒が「防災運動会」を企画・運営しました。その取組が茨城県主催のいばらきドリームパスプラン(いわゆるビジネスプランコンテスト)で金賞を受賞するなど、大きな成果をあげることができました。

また、開校時より本校の特長の一つとして推進している海外への長期留学派遣や海外からの留学生の受け入れについても顕著な成果をあげています。令和6年度には本校から8名の生徒たちがアメリカやカナダ等に長期留学に飛び立ち、その数は県内最多となっています。またヨーロッパやオーストラリアなどから海外留学生を3名受け入れることで、多くの生徒たちが日常的に異文化交流を体験しております。本年度より本校での海外留学促進の取組を広く茨城県全体に広げるため、本事業の連携校である県立中高一貫教育校 12校とそのノウハウを共有することとなりました。今後多くの県立中高一貫教育校で、たくさんの生徒が海外に長期留学したり、海外からの留学生とともに学びあったりする光景が日常的に見られるようになることを期待しております。

最後になりますが、茨城県教育委員会や本事業の事業協働機関の皆様をはじめ、心よくご支援・ご協力くださった国内外の大学・学校の皆様に深く御礼申し上げますとともに、本事業に参加した茨城県の高校生たちが将来日本ひいては世界の平和の実現やダイバーシティの推進に貢献してくれる日がくることを願ってやみません。

巻頭言（高校教育課長）	1
（拠点校学校長）	2
目次	3
第1章 研究開発概要	4
第2章 管理機関の取組	
2.1 DL ネットワークの構築	19
2.2 ダイバーシティに関する研修	21
2.3 茨城県 WWL 高校生フォーラム	23
第3章 拠点校の研究開発の内容・活動実績	
3.1 海外留学（派遣と受け入れ）	25
3.2 海外大学進学	
3.2.1 海外大学視察	30
3.2.2 留学課程のある国内大学視察（国際教養大・立命館アジア）	32
3.3 グローバルゼミ（4年次）	34
3.4 グローバルゼミ（3年次）	38
3.5 海外との交流・研修	
3.5.1 グローバルデイ（インド大使館）	39
3.5.2 オーストラリア研修	40
3.5.3 豪華客船おもてなし	41
3.5.4 オンライン授業交流	42
3.5.5 W S Cへの参加	43
3.5.6 全国高校生フォーラムへの参加	45
3.5.7 サマーキャンプへの参加	47
3.5.8 茨城高校生フォーラムへの参加（高校生平和大使として）	49
3.6 国内先進校の視察	
3.6.1 金沢大学附属高校	50
3.6.2 福島県立ふたば未来中学・高校	52
第4章 グローバル人材育成指標	53
第5章 研究開発の成果と課題	57
資料1 令和6年度の実施内容	59
資料2 掲載された新聞記事など	60
資料3 運営指導委員会・文科省視察 議事録	62

第1章 研究開発概要

令和6年度「WWL（ワールド・ワイド・ラーニング）コンソーシアム構築支援事業（グローバル人材育成強化事業）」に関する構想計画書は以下のとおりである。

事業構想計画書

1. 事業拠点校名

学 校 名：茨城県立勝田中等教育学校

学校長名：下山田 芳子

2. 構想名

茨城県を未来型ダイバーシティ県にするための教育の推進

3. 構想概要

本事業では、現在の日本が直面する人口減少問題の解決の糸口となりうる「ダイバーシティ」を推進する教育を開発し、県内各地域に点在している県立中高一貫教育校13校を対象に「ダイバーシティの推進をけん引することができる知識・経験・リーダーシップを有する人材」を育成するための「ダイバーシティ学びのネットワーク」を構築する。学校の小規模化・教員不足への対応によりダイバーシティ教育の内容の充実が難しくなっている状況を解決する策として、学校間ネットワークを生かし、拠点校が中心となって関係大学・地方自治体・企業・海外交流協力校などを結ぶ学びのネットワークを構築し、①世界標準の英語力②オープンマインド③ダイバーシティの知識・経験④リーダーシップの4つの資質・能力の育成を図るための取組を連携校と共有・共同実践し、開発した教育を事業後も継続できる土台作りを行うことで、未来型ダイバーシティ県を支える人材育成に資する。

4. 体制

関係機関・学校に関する情報								代表者・校長名
管理機関	茨城県教育委員会							柳橋 常喜
事業拠点校	茨城県立勝田中等教育学校 (国・ <input checked="" type="checkbox"/> 公・私)							下山田 芳子
	学科・コース名		1年	2年	3年	計	学校規模	
	対象	普通科・後期課程	115			115	0	
	対象外	前期課程	120	120	120	360	0	
							475	
事業共同実施校	①	なし (国・公・私)						
事業協働機関 (国内外の大学、企業、 国際機関等)	①	茨城大学 グローバルエンゲージメントセンター					池田 庸子	
	②	常磐大学 国際交流語学学習センター					坂場 由美子	
	③	株式会社WTOC					堂原 有美	
	④	社団法人 国際教育交流ネットワーク機構東京支部					本庄 伊吹	
	⑤	株式会社 アイエスイ					平田 敏之	
	⑥	Global Exchange Education					大谷 敦子	
事業連携校 (国内外の高等学校等)	①	茨城県立日立第一高等学校 (国・ <input checked="" type="checkbox"/> 公・私)					磯邊 裕一	
	②	茨城県立太田第一高等学校 (国・ <input checked="" type="checkbox"/> 公・私)					谷津 勉	
	③	茨城県立水戸第一高等学校 (国・ <input checked="" type="checkbox"/> 公・私)					御厩 祐司	
	④	茨城県立鉾田第一高等学校 (国・ <input checked="" type="checkbox"/> 公・私)					飯山 美都子	
	⑤	茨城県立鹿島高等学校 (国・ <input checked="" type="checkbox"/> 公・私)					小沼 浩幸	
	⑥	茨城県立竜ヶ崎第一高等学校 (国・ <input checked="" type="checkbox"/> 公・私)					太田垣 淳一	
	⑦	茨城県立土浦第一高等学校 (国・ <input checked="" type="checkbox"/> 公・私)					プラニコケンドラ	
	⑧	茨城県立下館第一高等学校 (国・ <input checked="" type="checkbox"/> 公・私)					木村 功	
	⑨	茨城県立下妻第一高等学校 (国・ <input checked="" type="checkbox"/> 公・私)					生井 秀一	
	⑩	茨城県立水海道第一高等学校 (国・ <input checked="" type="checkbox"/> 公・私)					福田 崇	
	⑪	茨城県立並木中等教育学校 (国・ <input checked="" type="checkbox"/> 公・私)					柴崎 孝浩	
	⑫	茨城県立古河中等教育学校 (国・ <input checked="" type="checkbox"/> 公・私)					中久喜 歩	

5. 申請を希望する理由

本事業で育成を目指すグローバル人材とは、「ダイバーシティの推進をけん引することができる知識・経験・リーダーシップを有する人材」である。少子化や生産年齢人口の大幅減少については、以前から将来の日本が直面する大きな課題とされている。日本の歴史において、改革を必要とする時代に現れたリーダーは、海外の事情をよく知るグローバル人材であった。大化の改新後には、唐の律令政治をよく知る遣唐使、明治維新では、欧米に派遣された岩倉使節団の留学生など、実際に海外に渡り、そこで得た知識・経験をもとに、それらを日本の事情にあわせて改良・改善した人材が改革時のリーダーであった。未曾有の人口減少という、かつて直面したことのない事態に対応していかなければならない日本、そして30年後には約20%の人口減が推計されている茨城県の行政には、そうしたグローバル人材が必要である。将来的に行政を支える人材を多く輩出すると考えられる中高一貫教育校において、グローバル人材を育成するためのネットワークを構築することは、茨城県を未来型ダイバーシティ県とし、様々な課題を解決する人材を育成するための教育に資するものである。

また、学校の統廃合・小規模化が進む中で、教育の質を落とすことなく新しい教育の研究開発を共同開発する学校間連携を促進するためにも、本事業を通して学びのネットワークの構築を図りたい。

6. 管理機関の概要

(1) イノベティブなグローバル人材育成に関する計画、戦略

茨城県は、大井川和彦知事のもと、産業・農業・教育等様々な分野で数々のプロジェクトを施策化してきた。「外国人材活躍促進事業」や「茨城県産農産物のグローバル市場への進出」、「次世代グローバルリーダー育成事業」など、国内の少子化問題を踏まえて未来の労働力や市場の獲得をグローバルな視野で解決していこうという施策と並行して、他県に先駆けて取り組んでいるのが「ダイバーシティの推進」である。これから日本社会が直面する生産年齢人口の大幅な減少による労働力不足問題を、女性や若者、外国人などこれまで以上に多様な人材を活かしていくことで解決していくことがねらいである。

ダイバーシティを推進する本県において、実際にダイバーシティ先進国でその現実や課題を経験し、その経験を社会の仕組みに生かしていくことができる人材の育成は急務である。そこで本県では、そうした人材の輩出を目標としている中高一貫教育校のグローバル教育やSTEAM教育等、特色ある教育の推進のため、県独自の学校支援予算をあてる「チャレンジプロジェクト」を立ち上げ、中核となる学校の教育内容の構築の財政的支援を行ってきた。今回の拠点校である勝田中等教育学校に対しては、令和3年度より3年間、支援重点校に指定し、グローバル教育を特色とするKATSUTAビジョンの構築のための予算として、毎年約500万の支援を行ってきた。

(2) 過去5年間の取組実績

- ・高校生国連グローバルセミナー：自治体では唯一、国連大学と連携した全10回のプログラム
- ・次世代グローバルリーダー育成事業：オンラインでの英語講座やイングリッシュキャンプを実施
- ・いばらき海外留学支援事業：短期留学（10万円×50人）及び長期留学（100万円×2人）の支援
- ・外国語指導助手招致事業：県立高校のALTを40人（R1）から64人（R5）に段階的に増員
- ・ネイティブ英語教員の採用：過去5年間に9人のネイティブ教員を採用し質の高い授業を提供
- ・英語プレゼンテーションフォーラムや英語ディベート大会の開催

7. 事業拠点校の概要

(1) 管理機関における事業拠点校及び事業共同実施校の位置づけ

県内の中高一貫教育校13校のうち、特にグローバル教育を特色とする勝田中等教育学校を事業拠点校とし、海外留学生の派遣や受入れ・海外大学研修などのグローバル事業を開発し、そのノウハウを事業連携校12校と共有する。事業協同実施校はない。

(2) 現状

a. イノベティブなグローバル人材育成に関する学校の教育理念

人口減少と高齢化という課題を抱えた日本社会は今、日本人に限らない多様な人材が活躍できる社会づくりを進めている。本校では、その多様な世界で活躍するための①世界標準の英語力②AIを活用することができる非認知能力（創造力・協働力・挑戦力）③リーダーシップと異文化適応能力の3つの資質・能力の育成を目指す。

b. 探究型学習に関する教育課程等の特色

主に非認知能力を育成する探究活動と学びのフィールドを広げるための英語力を学びの両輪とした「KATSUTA ビジョン」という6年間一貫の教育計画を実践している。



c. イノベティブなグローバル人材育成に向けた教育課程上の取組

① Global Competence Program (株式会社アイエスエイと共同開発)

中等前期課程の「総合的な学習の時間」の30時間を使い、外国人講師によるオールイングリッシュで、21世紀型スキル・グローバルに通用する知識・マインドセットを体得させるプログラム。アカデミックスキルとして、Design Thinking や Diversity などについて学ぶ。

② TOEFL を軸とした英語教育・語学教育

ネイティブスピーカー(県ALT)を4名配置しており、英語の全授業がネイティブスピーカーとのチームティーチングとなっている。特に中等前期課程においては、週5時間ある英語の授業のうち1時間は、TOEFL Primary の準備として海外コースブックを活用した英語の授業を実施。その他、上記①の総合的な学習の時間や、英語と美術などの教科横断型授業を英語で行ったりするなどの部分的な English Immersion を多く取り入れる他、前期課程で第二外国語体験を5時間組み込んでいる。

(3) 過去5年間の取組実績

a. 大学や企業、国際機関等と協働した主な取組

「多文化共生」に関する高大連携(茨城大学グローバル教育センター) / カナダ3州と海外留学に関する協定を締結 / マレーシアの3大学との指定校制度の提携 / 株式会社公文とグローバル教育に関する協定を締結

b. 国際性を高める取組

アメリカ公立高校交換留学奨学金プログラム / 文部科学省「#せかいぶ」加盟校

8. 構想目的・目標の設定

(1) イノベティブなグローバル人材像

現在の日本が直面する大幅な人口減少問題、そしてその解決の糸口となりうる「ダイバーシティの推進」に対応することができるリーダーとは、おそらく過去の大改革時と同様、すでに先進的に同様の問題に取り組んでいる海外の事情をよく知り、その解決に向けて世界のネットワークを有効活用することができる人材である。そのためには、①世界共通語である英語を自由に操り、②多種多様な人々と交わることができるオープンなマインドを有し、③グローバル課題に関してある程度学術的な知識を身に付けている必要がある。そして最終的には、茨城県の行政の中核にかかわり、④未来型ダイバーシティ県としての茨城県の未来をけん引できるリーダーシップを有していなければならない。

(2) ALネットワークの目的と役割

上記①～④の資質を有するグローバル人材の育成に必要な学びのネットワークを「ダイバーシティ学びのネットワーク(以下DLネットワーク)」と命名する。DLネットワークは、将来の日本、特に茨城県のダイバーシティ政策に貢献できる人材の育成を共に行う共同体である。主な役割は以下となる。

- ①拠点校における「未来探究」グローバルゼミのカリキュラム開発
- ②拠点校・連携校における留学生の派遣・受入れにかかる業務および留学促進のための取組
- ③拠点校・連携校における海外大学進学にかかる業務および海外大学進学のための取組
- ④高校生がダイバーシティに関して知識を得たり体験したりする大学の講義の先取り履修
- ⑤拠点校・連携校における海外大学体験のための海外研修の企画・運営
- ⑥拠点校・連携校の生徒・教員対象のダイバーシティに関する研修の企画・運営

(3)短期・中期・長期的な目標

①短期的目標（2024年度内）

- ア DL ネットワーク内の連携校 12 校との連絡会議（DL ネットワーク推進協議会）の開催
- イ DL ネットワークの運営指導委員会の設置と第 1 回運営指導委員会の開催
- ウ 「ダイバーシティ」に関する講義の聴講に関する茨城大学との高大連携協定の締結
- エ 「ダイバーシティ」に関するワークショップを県との共催により企画・開催
- オ 連携校 12 校も含めた 2025 年度からの海外留学派遣と海外留学生の受入れの募集
- カ 海外留学派遣と海外留学生の受け入れ事務に関する連絡会議の開催
- キ 海外留学生を交えた校内高校生会議の開催

②中期的目標（2025～2026 年）

- ア 連携校 12 校を含めた DL ネットワークからの海外留学者 20 名以上
- イ 連携校 12 校を含めた DL ネットワークにおける海外留学生の受入れ 30 名以上
- ウ 連携校 12 校を含めた DL ネットワークからの海外大学体験研修の参加者 20 名以上
- エ 連携校 12 校を含めた DL ネットワークからの高校生会議への参加者 50 名以上
- オ 連携校 12 校を含めた DL ネットワークにおける「ダイバーシティ」に関する講義やワークショップの受講者 100 名以上
- カ DL ネットワークの評価委員会の設置と委員会の開催

③長期的目標（2027～2034 年）

- ア 連携校 12 校を含めた DL ネットワークから海外大学進学者を 10 名以上
- イ 拠点校の海外大学進学率 10%
- ウ 連携校 12 校を含めた DL ネットワークの学校においてダイバーシティが進み、生徒の進路選択が多様化
- エ DL ネットワークで学んだ生徒が社会人となり、日本のダイバーシティ推進に貢献できる職に就く
- オ 県内職員のダイバーシティ化が進み、ネイティブ教員の割合増

10 ALネットワークの形成

(1) AL ネットワーク運営組織



ネットワークは以下の 7 つの構成団体で形成される。

- ①茨城県教育委員会
- ②茨城県立中高一貫教育校 13 校
- ③ダイバーシティを推進する企業
- ④ダイバーシティを研究する大学
- ⑤茨城県内の自治体
- ⑥ダイバーシティの推進に関わる NPO 法人
- ⑦海外交流協力校

①DL ネットワーク推進協議会

本 WWL 事業を推進する管理機関・拠点校・連携校に学校外の協力団体を加えたステークホルダーにより構成される。推進協議会の実質の開催は、②の連絡協議会と③の運営指導委員会に代替する。

②DL ネットワーク連絡協議会

管理機関である茨城県教育委員会の高校教育課長のもとで、拠点校・連携校の代表者が出席して年1回行われる。WWL 事業における基本的な実施内容の周知を行う。また、拠点校の勝田中等教育学校には事務局を置き、国際コーディネーターと事務補助員を配置する。企画・運営の実務は勝田中等教育学校の未来探究室が推進部となり、グローバル・スタディ係を中心に行う。

③運営指導委員会

管理機関である教育委員会、外部協力団体を中心とする DL ネットワークの構成団体、本事業の事務局を置く拠点校が一同に介し、本事業の企画・運営の計画・成果などを共有し、改善に向けた討議を重ねる委員会を年に2回開催する。

④DL ネットワーク評価（検証）委員会

令和7年度以降に、本事業の成果を評価・検証するための委員会を設置する。

(2)関係機関の情報共有体制

DL ネットワーク内の情報共有は以下の3点を活用する。

- ①主に DL ネットワーク連絡協議会において、「教育情報ネットワーク」上の Google メールおよびオンラインシステムの Google Meet を活用する。
- ②主に DL ネットワーク運営指導委員会において、Zoom によるオンラインシステムを活用する。
- ③生徒の事前論議用に Google Chat でグループページを作る。

(3)修了生の国内外の大学への進学、海外留学、外国人生徒受入れ等の促進に向けた計画

①国内外の大学への進学

以下の DL ネットワークの協力団体等と連携して、拠点校・連携校においてア～エを実施する。

茨城大学グローバル教育センター・株式会社アイエスエイ・テイラーズ大学・INT 大学・サンウェイ大学

【拠点校】以下の取組により海外大学への進学を促進する。

ア グローバルデイ（年2回）

DL ネットワーク内の海外大学および海外大学進学あっせん団体などの関係者を招いてのブース展示会などを行うことに加え、グローバルキャリアをもつ社会人の講演も企画し、海外で学ぶことについて生徒・保護者と情報を共有する。

イ 未来探究カフェ（年3～4回）

希望者を募り開催する放課後体験教室で、海外大学で学ぶ日本人を講師に迎える。（これまでの講師：茨城県から初めてハーバード大に合格した松野氏、ミネルバ大学を日本人で初めて卒業した梅澤氏他）

ウ 海外大学進学推薦制度（アイエスエイとの協定）

海外大学進学を志す生徒・保護者に対する個別カウンセリングを実施

エ マレーシアの大学の指定校制度

指定校連携の協定を締結しているテイラーズ大学、INT 大学、サンウェイ大学の授業を体験する海外大学体験研修を行い、マレーシアの大学への進学を促進する。

【連携校】上記拠点校の取組のア・イ・エ（研修のみ）を、拠点校の事務局である国際交流コーディネーターが連携校の担当者と共に共有し、連携校の生徒は拠点校の生徒に交じって実施する。

②海外留学

以下の DL ネットワークの協力団体等と連携して、ア～カを行う。

国際教育交流ネットワーク機構（東京支部）・カナダ3州（デルタ・サレー・メープルリッジ）の教育委員会・株式会社アイエスエイ・茨城大学グローバルエンゲージメントセンター

【拠点校】以下の取組により海外留学を促進する。

ア グローバルデイ（年2回）

DL ネットワーク内の海外留学あっせん団体などの関係者を呼んで、ブース展示会などを行う他、実際に留学した生徒の現地レポートや事後報告会を行い、海外で学ぶことについて生徒・保護者と情報を共有する。

イ 留学カフェ（年1～2回）

留学した生徒による企画で座談会・懇談会を行う。

ウ アメリカ公立高校交換留学奨学金プログラム

国際教育交流ネットワーク機構と拠点校が連携して、アメリカの公立高校に1年間安価で留学できるプログラムを実施する。

エ アメリカ・カナダ・オセアニアなどへの長期留学

各国への1年間・半年間の留学についての説明・募集をグローバルデイで行う。

オ ターム留学・スポーツ留学・サマーキャンプなどの短期留学

短期留学についての情報を生徒・保護者に随意提供し、説明・募集を行う。

カ 海外留学帰国者へのサポート

- ・現地にいる間から進路について個別にオンラインで指導する体制をとる。
- ・帰国後は英語の授業を取り出し授業とし、英語力を保つためのネイティブスピーカーによる個人指導を行うとともに、TOEFLやIELTSなどの語学試験の受験のための準備をする。

【連携校】上記拠点校の取組のア～オを、拠点校の事務局である国際交流コーディネーターが連携校の担当者と共有し、拠点校の生徒と同様に実施する。

③海外留學生徒の受入れ

以下のDLネットワークの構成団体などと連携して、ア～イを行う。

Global Exchange Education・カナダ3州（デルタ・サレー・メープルリッジ）の教育委員会

【拠点校】以下の取組により海外留學生の受入れを促進する。

ア 1年間・半年間の長期留學生の受入れ（1～3名）

イ 3か月程度の短期留學生の受入れ（1～5名）

【連携校】上記拠点校の取組のア～イを、拠点校の事務局である国際交流コーディネーターが連携校の担当者と共有し、拠点校の生徒と同様に実施する。

(4)カリキュラムを研究開発する体制

拠点校における推進部である「未来探究室」（「総合的な探究の時間」を中心とする探究学習の研究開発を行っている）のグローバル・スタディ係が中心となって、茨城大学グローバルエンゲージメントセンターと連携しながら行う。適宜その成果を事務局の国際交流コーディネーターによって連携校と共有する。

(5)テーマと関連した高校生国際会議等の計画

令和6～7年度に開催する「高校生会議」の会議を企画する。

①高校生会議（令和6年度）主催：拠点校

- ・拠点校の「未来探究」グローバルゼミの生徒が企画・立案をし、拠点校・連携校の希望生徒が参加して、海外留學生と拠点校の生徒が「理想の学校」についてディスカッションを行う。

（計画）4～6月 「未来探究」グローバルゼミにおいてディスカッションのテーマを検討

7～11月 準備委員会を設置し、準備会議を行う

12～1月 校内外に周知・参加者を募集 2月 高校生会議の開催

②高校生会議（令和7年度）主催：拠点校

- ・拠点校の「未来探究」グローバルゼミの生徒を中心に、連携校からも希望者を募集し、13校で受け入れている海外留學生と拠点校・連携校の生徒が「理想の国」についてディスカッションを行う。

（計画）4月 準備委員会を設置し、各校からメンバーを募集する。

5～11月 準備会議（リモート）を行う

12～1月 拠点校・連携校において周知・参加者を募集 2月 高校生会議の開催

(6)フォーラムや成果報告会等の実施に向けた計画

- ・令和6～7年度

拠点校の探究校内発表会「未来探究フェス」にて1年間の成果を発表する。1年間の活動内容・成果を報告するリーフレットを作成し、校内外に配布する。

- ・令和8年度

拠点校・連携校における各校の成果をフォーラムを開催して発表する。

(7)情報収集・提供等、その他の取組に関する計画

- ・海外大学との連携を強化するため、訪問・視察を行う。
- ・海外における高校生会議（Youth Summit）などを視察あるいはリサーチをして、本高校生会議の開催に資する。
- ・拠点校は、適宜連携校の担当者と留学生派遣や受入れのノウハウを共有するためのリモート打合わせを開催する。

1 1. 研究開発・実践

(1) カリキュラムに位置づけられた短期・長期留学や海外研修

		1年次	2年次	3年次	4年次	5年次	6年次
未来探究 グローバルプログラム	短期国内活動		異文化体験 キャンプ	沖縄フィールドス タディ（現地外国 人との対峙）			
				English Camp			
	短期国外活動					アジアフィー ルドスタディ	
	短期海外研修			オーストラリア研修		マレーシア 海外大学体験 研修	
教育課程外の留学・研修					長期留学（1年・半年）		
					短期留学（ターム留学）		
				スプリング・サマーキャンプ			
					Mission on the Ground		
海外留学生の受け入れ					1学年1～3名		

※赤（必修）緑（自由参加）

①短期・長期留学

拠点校では、カリキュラム上必須となっている短期・長期留学はない。海外留学には少なくない経済的負担が伴うため、あくまでも希望によるものと位置付けている。ただし、すべての短期・長期留学については、帰国後の留学審査で拠点校における学習と同等のものとみなされればすべて拠点校の履修単位として認められる。

②国外活動・海外研修

- ・フィールドスタディ 修学旅行として実施するものである。
- ・オーストラリア研修 20年以上交流を続けているオーストラリアの姉妹校ブロードフォードセカンダリーカレッジを10日間訪問し、現地授業に参加する。
- ・マレーシア海外大学体験研修 令和7年度より実施予定。マレーシアにある指定校連携を提携している大学と協力して、10日間程度、実際の大学生生活を体験する研修。拠点校と連携校が共同で実施する予定。
- ・スプリング/サマーキャンプ 長期休暇中にカナダ等で行われる世界から集まる生徒とともに学ぶ語学キャンプ。学校主催ではないがDLネットワークの協力団体による運営

(2) 外国人生徒の受け入れ及び体制の整備

海外留学生の受け入れについては、DLネットワークのGlobal Exchange Educationと拠点校の推進部である「未来探究室」のグローバル・スタディ係、事務局の国際交流コーディネーターが連携して行う。拠点校においては、すでにこれまでに3名の長期留学生の受け入れ実績があるが、連携校ではほとんどないため、今後拠点校がそのノウハウを連携校の担当者と、オンライン打ち合わせ等と通じて共有することで、DLネットワーク全体の受け入れ数を増やしていく。

(3) テーマとして設定するグローバルな社会課題

Diversity and Inclusion を大きなテーマとする。日本が直面する大幅な人口減少問題、そしてその解決の糸口となりうる「ダイバーシティの推進」を日本そして茨城県はどのように進めていったらいいのか、という最終課題に向けて、海外事情のリサーチやこれまでの研究結果などを知識として得る他、海外体験・国内体験を通じて学びを深め、グローバル課題として解決方法を多方面から考えていく。

(4) 関係機関との協働による先進的なカリキュラムの研究開発・実施体制

以下のDLネットワークの協力団体等と連携しながら①、②を实践する。研究成果に応じて適宜、拠点校の取組を連携校と共有する。

①【茨城大学グローバルエンゲージメントセンター】

a 茨城大学における「多文化共生」に関する講義の先取り履修

すでに拠点校の前期課程において実施している「多文化共生」の講義の中で、茨城大学の留学生と大学生との間で共同ワークを行う取組を、後期課程においても「未来探究」の中で発展させて行う。

b 茨城大学における留学準備科目及び国際共修授業の先取り履修

茨城大学が提供するグローバルコミュニケーションプログラム内の留学準備に関わる科目（例 Studying Abroad, International Exchange など）及び日本人学生と留学生が共に学ぶ国際共修科目を拠点校・連携校の生徒がオンラインで受講できるようにする。

②【独立行政法人 大学改革支援・学位授与機構教授（元茨城大学教授）】

「グローバル人材の資質」の育成にかかるルーブリックの策定

拠点校において令和3年度から研究している「未来探究」の資質育成のためのルーブリックに、RFCDC

(Reference Framework of Competence for Democratic Culture) や拠点校で実施している Global

Competence Program のルーブリックを反映させる取組をさらに継続して行い、最終的には生徒とルーブリックを共有し、グローバル人材度を可視化できるようにする。

(5) 新たな教科・科目の設定

拠点校において、グローバル人材の育成を念頭に以下の2つの学校設定科目を設置する。

①「チャレンジ・プログラム」

後期課程4～5年次生徒が参加する通年のゼミにおいて「グローバルゼミ」を開設する（点線部分）。

	1年次	2年次	3年次	4年次	5年次	6年次
総合的な学習の時間 (未来探究) 週2時間	Global Competence Program					
	地域探究		夢探究			
			グローバルゼミ			
			サイエンスゼミ			
探究的な学習の時間 (未来探究) 週1時間				夢探究		
				グループ研究	個人研究	
				グローバルゼミ		
				サイエンスゼミ		
チャレンジプログラム (学校設定科目) 週1時間				プログラミングゼミ		

a 研究の概要

- ・茨城大学グローバルエンゲージメントセンターと連携した「多文化共生」「留学前準備」「国際共修科目」に関する講義履修
- ・海外留学生とのダイバーシティに関するディスカッション
- ・生徒による高校生会議の企画・立案・運営
- ・多文化共生に関する会議への参加
- ・ダイバーシティ政策の立案

b 年次研究計画

<令和6年度>

- ・茨城大学との高大連携にかかる協定の締結と講義履修開始
- ・茨城大学グローバル教育センターと「多文化共生」のカリキュラム共同開発
- ・既成の高校生会議、先進校視察
- ・高校生会議の企画立案・準備・開催
- ・グローバルゼミの成果報告

<令和7年度>

- ・茨城大学の「多文化共生」カリキュラム実践・連携校も参加
- ・「多文化共生」に関するフォーラムへの参加
- ・ダイバーシティ政策に関する会議への参加・講演などの招へい
- ・高校生会議の企画立案・準備・開催

<令和8年度>

- ・茨城大学との成果発表
- ・ダイバーシティ政策コンテストへの出場
- ・高校生会議の企画立案・準備・開催
- ・成果発表のためのフォーラムの実施

②「英語特講（仮）」

後期課程6年次において、海外大学あるいは英語で学ぶ国内大学への進学を志す生徒を対象にしたネイティブスピーカー講師による授業を設定する。

a 研究の概要

- ・株式会社アイエスエイとの簡易バカロレアプログラム（放課後）の共同実施
- ・海外大学進学に必要な Essay Writing の指導
- ・TOEFL および IELTS の指導

b 年次研究計画

<令和6年度>

- ・簡易バカロレアプログラムのカリキュラムへの一部導入の検討開始
- ・海外大学進学の指導体制のリサーチ

<令和7年度>

- ・ネイティブスピーカーの授業の導入
- ・年間計画の策定

<令和8年度>

- ・簡易バカロレアプログラムのカリキュラムへの一部導入開始

(6) バランスよく学ぶ教育課程の編成（Ⅲ-f）

- ・3クラス編成の小規模学校のため、文理分けを行わないコースの設定などは難しく、5年次に全員を対象に文理分けを行いクラスを編成する。
- ・全クラスにおいて、英語・数学は6年次まで必履修であり、文理どちらのコースであってもバランスよく学べる教育課程となっている。

(7) 工夫された学習活動の実施に向けた計画

前期課程より探究学習と英語教育をすべての教育活動の両輪としており、特に英語については海外留学を可能にするため「英語で学ぶ」ことに早期から慣れ、世界標準の英語力をつけることを念頭においたカリキュラムとなっている。

① Global Competence Program（株式会社アイエスエイと共同開発）

中等前期課程の「総合的な学習の時間」の30時間を使い、外国人講師によるオールイングリッシュで、21世紀型スキル・グローバルに通用する知識・マインドセットを体得させるプログラム。アカデミックスキルとして、ICT、Design Thinking や Diversity などについて学ぶ。

② TOEFL を軸とした英語教育・語学教育

ネイティブスピーカー（県 ALT）を 4 名配置しており、英語の全授業がネイティブスピーカーとのティームティーチングとなっている。特に中等前期課程においては、週 5 時間ある英語の授業のうち 1 時間は、TOEFL Primary の準備として海外コースブックを活用した英語の授業を実施している。

③ イマージョン授業

上記①の総合的な学習の時間や、英語と美術などの教科横断型授業を英語で行ったりするなど、部分的な English Immersion を多く取り入れる。

(8) 大学教育の先取り履修の計画（実施）

<令和 5 年度以前>

- ・前期課程において「多様性」に関する高大連携のスタート
- ・放課後体験学習「未来探究カフェ」において茨城大学の海外留学生とのワークショップを拠点校生徒向けに過去 2 回開催（令和 3～4 年度）
- ・茨城大学の「多文化共生」の講義のフィールドワークやオンラインディスカッションに、中等 3 年次のグローバルゼミの生徒が 8 時間参加し、大学生や留学生と共同グループ学習を行っている。（令和 5 年度）

<令和 6～7 年度>

- ・茨城大学との高大連携（先取り履修）にかかる協定の締結と講義履修開始
- ・「多文化共生」及び「海外留学準備」における講義の履修の検討

<令和 8 年度>

- ・先取り履修の成果検証（卒業生の茨城大学への入学など）

(9) より高度な内容を学びたい高校生のための拠点校・事業連携校の条件整備

- ・茨城大学における先取り履修を進める中で、より高度な科目の聴講を可能にする協定を検討する。
- ・拠点校で設置している「学術顧問」による大学出前授業などの実施を事業連携校に広げる。

1 2. 実施体制の整備

(1) 管理機関による AL ネットワークの整備

- ・DL ネットワーク連絡協議会を年度当初に 1 回開催し、年度の実施内容を連携校と共有する。
- ・拠点校との連絡報告を随時行い、DL ネットワークの効果的活用を確認する。
- ・DL ネットワーク運営指導委員会を年に 2 回開催し、令和 8 年度の最終目的に向けた事業の進捗を報告、実施内容の充実に向けて助言を受ける。

(2) 管理機関による情報共有体制の整備

より高度で先進的な学びの機会を提供するための計画を確実に実施するため、それぞれの事業ごとに具体的な計画を立てるとともに、管理機関である茨城県教育委員会が中心となって、DL ネットワークを構成する茨城大学、海外大学、関係企業・団体、県立中高一貫教育校とのコンソーシアム会議を定期的に行う。また、メーリングリストやオンライン会議等を活用し、DL ネットワーク間の情報がより円滑に共有されるように体制を整備し、外部への発信の強化のため、公開ウェブページ等の整備を充実させる。

(3) 管理機関の長や拠点校等の校長の役割

① 管理機関の長の役割

- ・WWL 事業による成果の県全体への普及を念頭におきながら、県立中高一貫教育校の高大接続支援、学校運営支援、人事・採用の支援を行う。
- ・DL ネットワークにおける協力団体との戦略的な教育推進が県全体のダイバーシティ施策に反映できるよう、県行政各所との連絡調整を図る。

② 拠点校の校長の役割

- ・WWL 事業を通して、グローバル教育・英語教育を特長とする勝田中等教育学校の教育内容を一層充実させる。
- ・拠点校におけるグローバル教育・英語教育の成果・ノウハウを 12 校の連携中高一貫校と共有し、県教育委員会と協力しながら茨城県全体のグローバル教育の充実に貢献する体制を構築する。

(4) 運営指導委員会や検証組織の設置及び運営に向けた計画

①運営指導委員会（令和6年度～）

氏名	所属・職名	備考
池田 庸子	茨城大学グローバルエンゲージメントセンター長	高大連携
瀬尾 匡輝	上記センター准教授	ダイバーシティ・多文化共生
坂場 由美子	常磐大学 国際交流語学学習センター長	高大連携
堂原 有美	株式会社 WTOC	県教委主催の各種研修・大会受託
本庄 伊吹	(社) 国際教育交流ネットワーク機構東京支部	留学（アウトバウンド）
平田 敏之	(株) アイエスエイ代表取締役	拠点校学術顧問・留学 IB アドバイザー
大谷 敦子	Global Exchange Education	留学（インバウンド）
今本 理香	茨城県教育庁高校教育課指導主事	県教育委員会 管理機関

②検証委員会（令和7年度～）

茨城県教育委員会を事務局とし、学識経験者の委員を想定

(5) 拠点校等の卒業生を追跡調査する仕組みの構築に向けた計画

- ・拠点校、連携校の卒業生において以下を追跡調査する。
海外大学進学者数／大学入学後の海外留学者数／海外大学院進学者数／茨城県内への就職者数
- ・調査方法については今後検討

(6) 外国人生徒の日本での学習や生活の支援体制（IV-f）

- ・拠点校における支援体制（Buddy の設置・ホームステイ先との連携など）のノウハウを連携校とも共有する。
- ・日本語能力については来日前に十分確認し、ある程度自立した学校生活が可能な生徒のみ受入れを許可する体制をとる。

1.3. 財政等支援

(1) 自己負担額の支出計画

リモートアプリの契約費などの補助対象外の経費については、拠点校の運営費から支出する。

(2) 人的または財政的な支援、研修やセミナー等の実施に向けた計画

- ・拠点校の事務局として国際交流コーディネーター1名と補助事務員1名を置く。
- ・電通ダイバーシティラボへの委託により、拠点校と連携校における生徒・教員研修の実施を検討している。
- ・拠点校である勝田中等教育学校には、ALT（外国語指導助手）を4名配置するなどの人的サポートを行う。
- ・本 WWL 事業の成果報告にあたり、県教育委員会が主催でフォーラムを開催し、全県下の県立学校の生徒・教員を対象に参加を呼びかけ、グローバル教育の研修の機会とする。

(3) 支援期間終了後の事業の継続的な実施に向けた計画

- ・AL ネットワーク内での情報共有体制の継続・発展
- ・高度な学びを提供する環境整備（遠隔授業を含む）の充実と柔軟な教育課程編成の実施
- ・ALT 配置の拡充等、人的サポートの充実の継続
- ・本事業で研究開発した茨城県における留学支援体制の継続・発展
- ・高校生国際会議等、高校生が高度な学びの成果を発表する場の提供の継続

13.3ヶ年の事業計画概要

< 1年目 >

事業項目	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
DL ネットワーク連絡協議会		○										
茨城大学との高大連携協定	○	○	○									
茨城大学での先取り履修							○	○	○	○	○	
ダイバーシティ研修					○							
高校生会議（拠点校）											○	
海外留学生派遣募集事務						○						
海外留学生受入れ事務	○				○	○						○
DL ネットワーク運営指導委員会		○									○	

< 2年目 >

事業項目	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
DL ネットワーク連絡協議会	○											
茨城大学での先取り履修	○	○	○	○			○	○	○	○	○	
ダイバーシティ研修					○							
高校生会議（拠点校・連携校）											○	
海外留学生派遣募集事務	○					○						
海外留学生受入れ事務	○				○	○						○
マレーシア海外大学体験研修											○	
DL ネットワーク運営指導委員会		○									○	
DL ネットワーク検証委員会										○		

< 3年目 >

事業項目	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
DL ネットワーク連絡協議会	○											
茨城大学での先取り履修	○	○	○	○			○	○	○	○	○	
ダイバーシティワークショップ		○			○				○			
高校生フォーラム（拠点校・連携校）											○	
海外留学生派遣募集事務	○					○						
海外留学生受入れ事務	○				○	○						○
マレーシア海外大学体験研修											○	
DL ネットワーク運営指導委員会	○										○	
DL ネットワーク検証委員会										○		

事業計画書

1. 事業拠点校名

学校名：茨城県立勝田中等教育学校
 学校長名：下山田 芳子

2. 事業実施期間

委託を受けた日から 令和 7年 3月 31日

3. 構想概要

構想名

茨城県を未来型ダイバーシティ県にするための教育の推進（インバウンド・アウトバウンド型）

概要

本事業では、現在の日本が直面する人口減少問題の解決の糸口となりうる「ダイバーシティ」を推進する教育を開発し、県内各地域に点在している県立中高一貫教育校 13 校を対象に「ダイバーシティの推進をけん引することができる知識・経験・リーダーシップを有する人材」を育成するための「ダイバーシティ学びのネットワーク（以下 DL ネットワーク）」を構築する。学校の小規模化・教員不足への対応によりダイバーシティ教育の内容の充実が難しくなっている状況を解決する策として、学校間ネットワークを生かし、拠点校が中心となって関係大学・地方自治体・企業・海外交流協力校などを結ぶ学びのネットワークを構築し、①世界標準の英語力②オープンマインド③ダイバーシティの知識・経験④リーダーシップの4つの資質・能力の育成を図るための取組を連携校と共有・共同実践し、開発した教育を事業後も継続できる土台作りを行うことで、未来型ダイバーシティ県を支える人材育成に資する。

4. 本事業における教育課程の特例の活用 有・無

5. 事業実施体制

事業項目	実施場所	事業担当責任者
ダイバーシティに関する研修	拠点校・連携校（オンライン）	株式会社 WTOC 代表 堂原有美
海外留学派遣	拠点校・連携校（海外学校）	社団法人国際教育交流ネットワーク 機構東京支部 株式会社アイエスエイ 取締役 平田 敏之
海外留学生の受け入れ	拠点校・連携校	Global Exchange Education 代表 大谷 敦子
高大連携による先取り履修	茨城大学（オンライン）	茨城大学グローバルエンゲージメントセンター 池田 庸子、瀬尾 匡輝
茨城県高校生会議	拠点校・ひたちなか市市民会館	拠点校 下山田 芳子 茨城県教育委員会 今本 理香
海外大学体験研修	マレーシア・シンガポール	拠点校 下山田 芳子
新規開設授業	拠点校	拠点校 下山田 芳子

体制図



6. 今年度の計画

(1) 事業項目別実施期間

実施期間：契約締結日～令和7年3月31日												
事業項目	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
① ダイバーシティに関する研修					○							
② 海外留学派遣					○	○			○			
③ 海外留学生の受け入れ						○	○	○	○	○	○	○
④ 高大連携による先取り履修（茨城大学）							○	○	○	○	○	
⑤ 高大連携による体験講座（常磐大学）	今年度は実施見送り											
⑥ 茨城県高校生会議（拠点校）									○			
⑦ 政策プレゼンコンテスト	企画を変更し、文科省主催の「高校生フォーラム」に置き換える											
⑧ 海外大学体験研修	今年度は実施なし（令和7年度より）											
⑨ 新規開設授業（拠点校）		○	○	○		○	○	○	○	○	○	
⑩ 未来探究ルーブリック作成									○			
⑪ リーフレット・報告書印刷											○	

(2) 今年度の具体的な事業計画

<AL ネットワークの形成>

【拠点校⇄事業協働機関】

- ・年2回のDLネットワーク運営指導委員会を開催し、事業全体の運営について検討・協議を行う。

【拠点校⇄連携校】

- ・年1回のDLネットワーク連絡協議会を開催し、上記事業項目の共同実施について確認する。
- ・連携校に上記事業項目への参加希望調査を行い、事業項目ごとに参加する学校と連携していく。

<研究開発・実践>

【① ダイバーシティに関する研修】（WTOCによる再委託・茨城県教育委員会主催）

- ・WTOCに再委託し、8月に拠点校・連携校の希望者対象に「ダイバーシティ」に関するワークショップを行う。9月中旬に再委託契約の締結を行い、10月上旬に「ダイバーシティワークショップ」を連携校・拠点校を結んだオンラインで実施予定。

【海外大学進学】【⑧海外大学体験研修】

・拠点校

令和7年度からの「海外大学体験研修」の企画にあたり、8/29（木）～8/31（土）に海外大学視察（教員2名マレーシア・シンガポール）を行う。また、海外大学進学に関する先進校視察や、海外大学留学制度をもつ国内大学の視察を適宜行う。

・連携校（希望する学校のみ）

拠点校からの海外大学進学に関する情報を共有し、各校で周知する。

【②海外留学の派遣（アウトバウンド）】

・拠点校、連携校（希望する学校のみ）

拠点校における海外留学推進体制を、連携校においても共有することで、茨城県全体の海外留学派遣数を増加させる。具体的には、希望する連携校が、生徒対象のオンライン説明会をISE, ISAと共催で実施し、各連携校で海外派遣生徒を募集する。

【③海外留学生の受け入れ（インバウンド）】

・拠点校、連携校（希望する学校のみ）

拠点校における海外留学受け入れ体制を、連携校においても共有することで、茨城県全体の海外留学生受け入れ数を増加させる。5/31（金）開催予定の連絡協議会において連携校に受け入れ希望を調査する。拠点校では令和6年9月から、連携校では令和7年1月より受け入れ開始。

【④高大連携による先取り履修（茨城大学）】（茨城県教育委員会主催）

- ・7～8月中旬に、茨城大学⇄県教育委員会で、高校生の先取り履修に係る協定の提携を行い、9月から拠点校・連携校の生徒の希望者を対象に、先取り授業を実施する。

【⑤高大連携による体験講座（常磐大学）】（茨城県教育委員会主催）

- ・今年度は実施の見込みなし

【⑥茨城県高校生会議（拠点校）】

- ・今年度は拠点校主催で拠点校のみで行うが、令和7年度以降は県教育委員会主催で実施し、連携校も含めた13校で開催し、文科省主催の「高校生フォーラム」に参加する参加校を決定するための大会とする。
- ・高校生会議におけるディスカッションにおいて、留学生ティーチングアシスタントとして県内に海外から留学している留学生を活用する。

【⑦政策プレゼンコンテスト】→企画変更・代替

- ・令和7年度からは同様の趣旨で文科省が行っている「高校生フォーラム」への参加をこれに代替する。

【⑨新規開設授業】（拠点校主催）

- ・「未来探究」にグローバルゼミを開設し、Diversity and Inclusionに関する共同研究を茨城大学と協働して行う。12/15（日）全国高校生フォーラムと12/19（木）茨城県高校生会議において、今年度の成果を発表する。
- ・グローバルゼミにおいて、留学生ティーチングアシスタントとして県内に海外から留学している留学生を活用する。

【⑩未来探究ルーブリック作成】（拠点校）

- ・本事業を通じた「グローバル人材の資質」育成にかかるルーブリックを策定し、事業全体の成果を計る指標とする。
- ・年1回本校の学術顧問を招聘した研修を実施し、学校全体でルーブリックの共同研究を行う。

【⑪リーフレット・報告書印刷】（拠点校）

- ・今年度の実施事項・成果などをまとめたリーフレットを作成・印刷し、周知用に配布する。
- ・今年度の実施事項・成果・国への報告などを収録した報告書を作成・印刷し、周知用に配布する。

<財政等支援>

- ・拠点校である勝田中等教育学校には、国際交流コーディネーター1名と補助事務員1名、ALTを4名配置する（支援期間終了後もALT4名配置は継続）。

第2章 管理機関の取組

2-1 DL ネットワークの構築



1 DL(ダイバーシティラーニング)ネットワークについて

- (1) 事業拠点校
茨城県立勝田中等教育学校
- (2) 県内事業連携校
茨城県立日立第一高等学校・太田第一高等学校・水戸第一高等学校・鉾田第一高等学校・鹿島高等学校・土浦第一高等学校・竜ヶ崎第一高等学校・下館第一高等学校・下妻第一高等学校・水海道第一高等学校・並木中等教育学校・古河中等教育学校 計 12 校
- (3) 事業協働機関
茨城大学・常磐大学・株式会社アイエスエイ・社団法人国際教育交流ネットワーク機構・株式会社 WTOC・Global Exchange Education

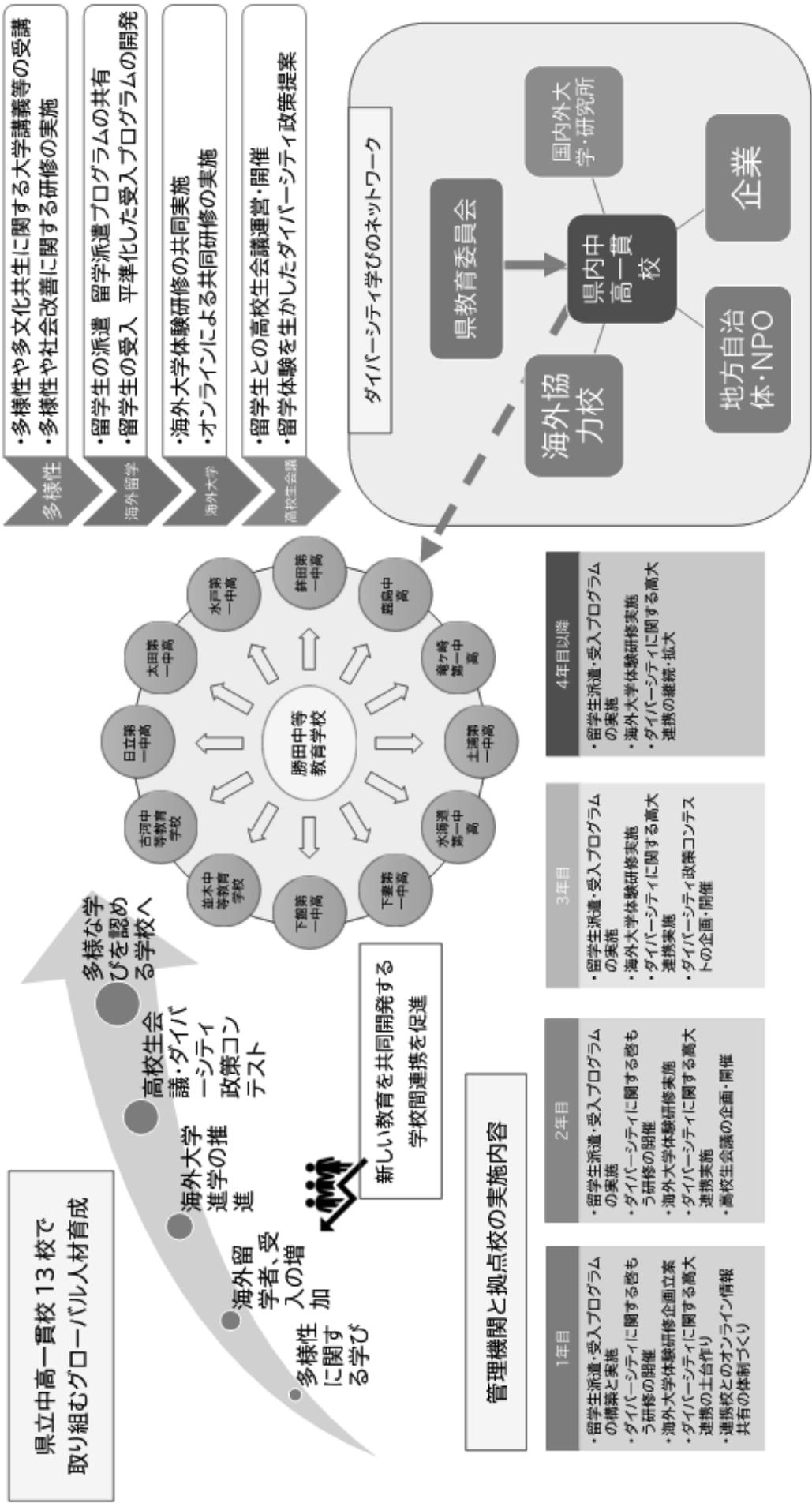
2 管理機関主催会議

- (1) 令和6年度茨城県 DL ネットワーク連絡協議会（オンライン開催）
期日：令和6年5月31日（金）
参加者：拠点校及び県内連携校12校と事業協働機関、県教育委員会
内容：令和6年度茨城県 WWL コンソーシアム構築支援事業の実施計画の説明
- (2) 第1回茨城県 DL ネットワーク運営指導委員会（オンライン開催）
期日：令和6年7月2日（火）
参加者：拠点校、事業協働機関、県教育委員会
内容：令和6年度茨城県 WWL コンソーシアム構築支援事業の実施計画について
- (3) 第2回茨城県 DL ネットワーク運営指導委員会（対面：TKP 貸会議室水戸駅前）
期日：令和7年2月4日（火）
参加者：拠点校、事業協働機関、県教育委員会
内容：令和6年度実施内容の振り返りと今後に向けてのディスカッション
令和7年度実施計画について

3 管理機関主催イベント

- (1) ダイバーシティ研修（オンライン）
期日：令和6年10月13日（日）
参加者：拠点校・連携校希望生徒、教員
内容：21ページ報告書参照
- (2) 茨城県 WWL 高校生フォーラム
期日：令和6年12月19日（木） ひたちなか市文化会館
参加者：拠点校生徒と保護者、連携校教員、地域関係者
内容：23ページ報告書参照

茨城県を未来型ダイバーシティ県にするための教育を推進する学びのネットワーク



2.2 茨城県ダイバーシティに関する研修

実施報告書

報告者：株式会社 WTOC

1. 本プロジェクトの目的

茨城県WWLコンソーシアム構築支援事業のねらいである「茨城県を未来型ダイバーシティ県にするための教育の推進」を実現するため、本研修を通して、ダイバーシティの推進をけん引することのできる知識・経験・リーダーシップを有する人材を育成する。

2. 開催日

令和6年10月13日(日) 9時00分から12時00まで

3. 会場

オンライン(各学校又は自宅からアクセスする)

4. テーマ

「外国人と一緒に地域のお困りごとを解決しよう！」

5. 参加者数

茨城県WWLコンソーシアム構築支援事業の拠点校及び連携校の生徒 18名
(24名の申込み。うち5名は当日欠席のため、19名で実施。)

● 申込者数(24名)

勝田中等教育学校	10名(欠席者2名)
竜ヶ崎第一高等学校	5名
日立第一高等学校	3名(欠席者2名)
水海道第一高等学校	2名
下館第一高等学校	2名
下妻第一高等学校	1名(欠席者1名)
鉾田第一高等学校	1名

● 参加者数(19名)

勝田中等教育学校	8名
竜ヶ崎第一高等学校	5名
日立第一高等学校	1名
水海道第一高等学校	2名
下館第一高等学校	2名
鉾田第一高等学校	1名



6. 進行

株式会社 WTOC ファシリテーター 佐保田みなみ

7. 研修概要

- (1) 事前課題(フィールドワーク)
- (2) 研修プログラム ※使用言語は英語と日本語



茨城県WWLコンソーシアム構築支援事業
ダイバーシティ研修

高校生の皆さん!

外国人と一緒に地域のお困りごとを解決しよう!

WTOC事務局より
修了証書/参加費無料

※日本語と英語を使用するプログラムです。

10月13日(日) 9:00-12:00

参加対象：茨城県 WWL 連携校の希望校
場所：オンライン (Zoomを使用、学校
あるいは自宅からご参加ください)
ゲスト：地域に住む外国人 数名
①ダイバーシティ先進国の外国人(予定)
②ボランティア活動の外国人(予定)
③ワークショップ「自分たちができることを考えよう!」
④ワークショップ「自分たちができることを考えよう!」
⑤ワークショップ「自分たちができることを考えよう!」

締切：9月30日(月)

プログラム内容

- ①多文化共生って何?
- ②外国人と少人数で話したことの共有
- ③地域に住む外国人のご意見「実は、こんなこと困ってます!」
- ④ダイバーシティ先進国の事例
- ⑤ワークショップ「自分たちができることを考えよう!」
- ⑥ワークショップ「自分たちができることを考えよう!」
- ⑦ワークショップ「自分たちができることを考えよう!」

「自分が住んでいる地で外国人を見つけて、話しかけてみよう!」など

以下のURLで、お役のQRコードからご参加ください。
QRコードは当日の研修からご共有いたします。
<https://a.gd/1J10L>

お問合せ
お申し込み
茨城県ダイバーシティ研修事務局(株式会社WTOC内)
tsukuba@wto-c.com

締切 9/30

- ①多文化共生って何？（レクチャー）
- ②事前課題（フィールドワーク）の共有
- ③地域に住む外国人の意見（レクチャー・意見交換）

台湾、ブラジル、インド、イギリス国籍の4カ国の方、日本からは日本語教室ルンルンの先生が参加。

- ④ダイバーシティ先進国の事例（レクチャー）

在日カナダ人 Iain さんが先進国カナダの事例をレクチャー。

- ⑤プレゼンテーション（ディスカッション・プレゼンテーション）

5つのグループに分かれて施策を考えました。

(3) 振り返りワーク

8、振り返りワーク結果

●回答者数（17名）

勝田中等教育学校	8名
竜ヶ崎第一高等学校	4名
日立第一高等学校	1名
水海道第一高等学校	2名
下館第一高等学校	1名
鉾田第一高等学校	1名

(一部抜粋)

- 今日はどんなことを学びましたか。どんな発見がありましたか？自由に書いてください。

- ・外国人の方には私が知らなかった困り事がたくさんあること
- ・外国人の方の悩みを知れたり、自分が日本語教室に通っているなのでその時に何がわからないかをきちんと知れたらもっといいと思った。悩みを抱えているひとは多いことを知れてよかった

- 今日の研修を受ける前と後で、あなたに変化はありましたか？あった場合、どんなことが教えて下さい。

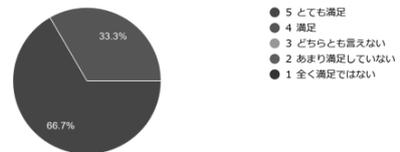
- ・自分たちには何ができるのか積極的に考えることができた。
- ・日本に住む外国の方に興味が湧き、問題を解決する手助けをしたいと思った
- ・今日の研修で日本に住んでいる外国人は日本語が完璧で、はきはき話せるものだと考えていましたが、話せない人もいるので、その人たちにやさしい日本語などでやさしく接してあげたいと思いました。

- 今日の研修を受けて、やってみたいこと、挑戦してみたいことはありますか？それはどんなことですか？

- ・外国人と日本人が繋がれるような機会を作る場を作りたいです。
- ・日本語教室ボランティアに参加してみたい
- ・街で外国の方を見つけたら積極的に話しかけに行ってみたい
- ・日本語だけでなく、英語、自分が独学しているフランス語など、多言語で且つ具体的で、わかりやすい説明をできるようにしたい。



研修で得たいもの、やってみたいこと、期待すること...達成されましたか？満足度を教えてください。
18件の回答



2.3 茨城県 WWL 高校生フォーラム

実施報告書

報告者：株式会社 WTOC

1. 本プロジェクトの目的

現在の日本が直面する人口減少問題の快活の糸口となりうる「ダイバーシティ」を推進する教育の開発を通して、ダイバーシティの推進をけん引することができる知識・経験・リーダーシップを有する人材を育成するため、研究者や起業家、海外の留学生との知的交流の場や生徒の研究成果の発表の場とします。

2. 開催日

令和6年12月19日（木）13時20分から16時50まで

3. 会場

ひたちなか市文化会館小ホール

4. テーマ

「高校生の私たちが地域のダイバーシティのためにできることは？」

5. 参加者

勝田中等教育学校の生徒・教員・保護者、WWL 連携校の生徒・教員、WWL 連携校以外の教員
地域の外国人、ひたちなか市企画調整課、塾講師、元勝田中等学校の教師

■講師：武蔵野大学・東郷賢教授

■運営指導委員：

- ・茨城大学・グローバルエンゲージメントセンター長 池田庸子様
- ・常磐大学・国際交流語学学習センター長、坂場 由美子様
- ・茨城大学・准教授 瀬尾 匡輝様
- ・国際教育交流ネットワーク機構東京支部・代表理事 本庄 伊吹様
- ・株式会社アイエスエイ・代表取締役・平田 敏之様
- ・株式会社アイエスエイ・登坂貴（とさかたかし）様
- ・Global Exchange Education・代表 大谷 敦子様 ※当日欠席
- ・茨城県教育委員会・高校教育課指導主事 今本 理香様



6. プログラム内容

- 第一部 : 基調講演 「Are you ready for a world-class education?」
講師 武蔵大学 国際教養学部 東郷 賢 教授
- 第二部ー1 : プレゼンテーション「地域におけるグローバル課題の解決に向けた施策とは」
発表者：①高校生大使 ②3年次生(グローバルゼミⅠ) ③4年次生(グローバルゼミⅡ)

●第二部ー2：パネルディスカッション

「茨城県を未来型ダイバーシティ県にするためにできること」

パネラー：4年次生3名 海外留学生1名 地域に住む外国人2名

進行：Lauren Cody 先生 (勝田中等教育学校 ALT)



7、主催

茨城県教育委員会

8、アンケート結果（回答者数 104 名）

●イベント全体の感想やご意見をお聞かせください。（77件より抜粋）

●勝田中等教育学校 生徒

・グローバルリーダーになるために日々チャレンジしている生徒の発表を聞いて刺激を受け、また自分自身も日頃の成果を人前で見せる良い機会になった。もっとオーディエンスを増やして、他の学校の人たちにも見てもらえたら良かったと思う。

・勝田中等の活動のプレゼンや留学生の動画が、グローバルな活動の可能性を感じさせるものだった。教授の発表内容も鑑みて、これからの海外活動や地域活動のアイデアにわくわくした。

●勝田中等教育学校 保護者

・一部二部とも、素晴らしい内容でしたので、もっとお客さんに足を運んでもらえるよう、宣伝した方がよいと思います。

●本日のイベントを通して、自分が変わりそうなことや、これからはじめようと思ったことなど、何か変化がありましたら教えてください。（66件より抜粋）

●勝田中等教育学校 生徒

・同じ学年に世界で活躍しようと努力している人が多くいることを知り、刺激を受けた。私も置いていかれないように様々なプログラムに参加し、ダイバーシティを感じていきたい。

・今までは、あまり英語の勉強を自分からしなかったが、このイベントを通して英語の勉強をより頑張ろうと思った。

3.1 海外留学

・ 1 海外派遣

令和6年度 留学者（派遣）

	年組	氏名	留学先	期間
1	3-1	女	アメリカ イリノイ州	2024.8.1～2025.5.31
2	4A	女	アメリカ カリフォルニア州	2024.7.31～2025.5.31
3	4A	女	カナダ ノバスコシア州	2024.8.31～2025.2.3
4	4B	女	カナダ ノバスコシア州	2024.8.31～2025.6.30
5	4B	男	カナダ ブリティッシュコロンビア州	2024.8.25～2025.6.30
6	4C	女	カナダ ノバスコシア州	2024.8.31～2025.6.30
7	4C	女	アメリカ ミズーリ州	2024.8.5～2025.5.31
8	4B	女	ニュージーランド オークランド	2025.1.21～2025.4.12

令和6年度 海外研修参加者

1	4B	男	カナダ バンクーバー近郊 デルタ地区	2024.8.4～2024.8.24
2	4C	男	カナダ バンクーバー近郊 デルタ地区	2024.8.4～2024.8.24
3	3A	男	カナダ バンクーバー近郊 デルタ地区	2024.8.4～2024.8.25
4	4A	女	韓国 ソウル	2024.7.26～2024.8.1
5	4B	女	韓国 ソウル	2024.7.25～2024.8.1
6	4C	男	韓国 ソウル	2024.7.26～2024.7.31
	4C		アメリカ コネティカット州	2024.11.13～2024.11.22
7	4C	男	ニューヨーク	2024.7.23～2024.7.30
8	4B	女	スイス ジュネーブ	2024.8.16～2024.8.24
9	4A	男	マレーシア クアラルンプール	2024.7.下旬
10	4C	男	マレーシア クアラルンプール	2024.7.下旬

・ 2 海外留学生受け入れ

	学年	氏名	性別/出身国	期間	期間
1	4	Yuki Fujio	オランダ	2024.9～2025.7	10か月
2	5	Yarah van der Aar	オランダ	2024.9～2024.11	2.5か月
3	4	Odetta Hope Jackson	オーストラリア	2024.9～2024.11	2.5か月

(1) 留学生へインタビュー

オランダ人留学生ヤーラさんへ本校での留学で学んだことについてインタビューを行った。

Q 本校での学校生活で学んだことを教えてください。

日本語も少しずつ上達しましたが、まだまだ学ぶことが多いと感じています。皆さんとの日々の会話を通じて少しずつ成長できたことが何よりの宝です。日本の文化や学校生活についてもたくさん教えていただき、忘れられない思い出ができました。例えばクラスマッチがすごく楽しかったです。友達には日本の生活や礼儀、そして勉強の姿勢について多くのことを学ばせてもらいました。困難に直面し、新しい状況に適應する力も身に付けることができました。このような素晴らしい機会をいただき本当にありがとうございました。



左からヤーラさん（オランダ）、オデッタさん（オーストラリア）、ユキさん（オランダ）



8月レポート

風間悠那

留学生活、早くも10分が経ちました。最初の2週間は孤独を感じ、とても長く感じましたが最近1日があっという間です。学校が始まる前は家でゆっくりしたり、パーティーやBBQに参加することが多かったです。学校が始まり最初の1日目は人の多さで圧倒されてしまい、号泣しました。だんだんと慣れてきて授業も順調に受けることができます。それぞれの授業で友達を作ることができたり、友達に教えてもらったり、先生に助けを求めたりしながら理解しています。そして何より、人種の多さに驚いています。英語だけではなくスペイン語や様々な言語が飛び交っています。私はいつも4人でお昼を食べているのですが、フィリピン、タイ、バハマの出身で全員アメリカ出身ではありません。学校の先生をしているホストファミリーが教えてくれるので安心で、わかりやすいです。休日はガールスカウトに参加したり、友達と公園でピクニックをしたりして毎日充実した生活を送っています。今週は三連休なので、サンフランシスコを観光する予定です。ホストファミリーにお蕎麦やカレー、味噌汁などの日本食を作りました。体重計がないのでよくわかりませんが、二の腕がムチムチになった気がします。10月に学校に京都の学校の留学生が6日間訪れるみたいで、ホストになる予定です。スピーキング力は伸びたのかわかりませんが、リスニング力はついたと思います。今は中学英語で楽しく友達とお話して遊んでいます。これからますます頭張ります。



ホストドック様もいません。彼の名前はエースです。足でならなら名刺をくれますが手はまだ夕時だけです。お散歩とご飯の時だけそこへ遊びます。



そばを作りました。実は、私の祖父母の家は蕎麦屋なので。



サンフランシスコの空
港から家に向かう途中



ガールスカウトに参加しました。10月にはキャンプに行く予定です。楽しみ！！



フットボールのゲームを観に行きました。全くルールがわかりませんでした。ホストシスターにそれを書いたらみんなルールを理解していなくてただ友達と遊ぶだけのためにあると言っていました。



毎日友達と話しながらホストマザーの迎えを待ちます。

カナダ留学記

4年A組 12番 金子凜音 9月号



私は9月1日からカナダの東海岸部、ノバスコシア州にあるハリファックスという州都での5ヶ月間の留学生活が始まりました。

初日

乗り継ぎ先から3時間遅れて深夜2時過ぎにホストファミリーの家に到着しました。成田からモントリオール行きだったパイロットの方が声をかけてくださり、ポストカードやエア・カナダのバッジ、アメニティ等のプレゼントや、コックピット内の紹介、最後にはパイロットの帽子を被らせてくださり、一緒に写真を撮るという貴重な体験をすることができました。私はお礼として折り鶴をお渡しし、良い旅の始まりを迎えることができました。



ホームステイ

ホームステイ先にはレバノン出身のホストファミリー、ホストマザー、1つ歳上のベトナムから来ている留学生、同じ年の韓国から来た留学生がいます。近所に住んでいるホストファミリーの娘さんには日本人の留学生もいます。みんな同じ学校に通うので、心強いです。

私は最初の1,2週間、文化の違いから食事面に問題が起き、苦労しました。ホストマザーとのすれ違いや問題が重なり、何度か心が折れましたが、自分が生活していく環境を快適にするために、解決策を自分で考えて、周りの人の協力を経て、問題解決をすることができました。これは留学の醍醐味であるホームシックを経験できた他、カルチャーショックとの向き合い方や、人に遠慮はせずに配慮をする、勇気をだして前に進むしかないということを感じることができ、改めて他人や自分との向かい合い方を考えられる良い機会になりました。

学校生活、イベント

9:25に1限目が始まります。一日に授業は4コマあり、1コマ1時間15分の授業です。人によっては授業がないコマがある人もいますので、そういった人はカフェテリアや図書室で勉強したり、一度家に帰る人も居て、日本の大学のカリキュラムに似ていると感じます。4限目は15:35に終わるので、私は16時頃に家に着きます。私が受けている教科はEnglish, Mathematician, Career Development, Food for Healthyです。この四教科を毎日受けています。各授業で友達もでき、お昼は友達と一緒に図書室で食べています。昼の図書室は賑やかで、図書室内で飲食をできることや、パソコンでゲームをできることに驚きました。また、この1ヶ月だけでも様々なイベントがあり、校内はとても賑わっていました。

18日には教育委員会主催のBayside campがあり、他校の留学生とも交流ができました。新たに日本人の留学生はもろろん、カナダ、ドイツ、韓国、タイ、カザフスタン、イタリア出身の友達もでき、最後はみんなでスモアを作り、歌ったりして楽しかったです！



10月分レポート



4-B 加藤立健

(学習状況)

留学開始から二ヶ月が過ぎ、英語にも慣れてきました。最近は、とっさ口から出る言葉が英語になってきたと感じています。授業については、数学の授業で日本で習っていない範囲について取り組み始めたので、言語に加えて、単純に内容が難しいことが最近の課題になっています。ですが、今通っている学校には“FLEX Time”と呼ばれる1限と2限の間の自由に使える時間があるので、いつも先生や周りの友達に聞きながらなんとか乗りきれています。

それ以外は順調です！

(生活状況)

今月上旬にバスケットの3x3の大会がありました。ブラジル人とフランス人の友達と出場しました。結果は準決勝で負けましたが、一緒に練習したりする中で仲良くなれたので結果的には良かったです。来月にはバスケットボールのトライアウトがあるので、全力で頑張ります。10/30,31にはカナダのハロウィンをパーティーや街中でお菓子をもらったりして過ごしました。そして、コスチュームは力士です。



最近日本語がどんどん下手になってきているのを感じています。

授業

生物…今は毒を持っている生物について勉強しています。

私はalexandrium fundyensisについてのプレゼンテーションを作っています。

数学…連立方程式をやっています。

電卓に慣れてとても簡単に感じています。

ディベート…ノバスコシアで選挙があったのでその話を中心にディベートをしています。

英語…英語の小説などを読んで読み取ったことから自分の意見を書く練習をしています。

理科…今は化学反応について勉強しています。

日本語で学んだ時よりも簡単な気がします。



今月はいつもお世話になっている先生方に留学生でクッキーとアップルサイダーを届けたり、毎週日曜日に子供にバレーボールを教えるなどのボランティアをしました。

またハリファックスに引っかって灯台とショッピングセンターに行きました。私の住んでいるヤーマスにあるモールはお店が10個もないので三階建てのハリファクスモールにとっても感動しました。

バレーのトーナメントで二位以内に入らず、シーズンは終わってしまいました。

三位だったのでとても悔しいです。

12月からバレーボールクラブが始まるらしいのでとても楽しみです！

今月いっぱい帰国してしまふ友達がいって最後の日にはずっと大泣きしていました。

段々気温が下がってきて、体感温度はマイナスのことが毎日です。カナダで買ったウィンタージャケットを着ていても凍えそうに感じるのでこれらの冬を生き抜いていけるかとても心配です。





留学レポート 12月

齋藤 響葉

こんにちは！ あけましておめでとうございます。今年もよろしくお願ひします！ 私が留学に来て4ヶ月が経ち今月で一学期が終わろうとしています。学校は先月と変わらずやっています。ボランティア活動では毎月日本の文化についてのポスターを作って図書館に貼ることをしています。結構後の話になるんですが3月に図書館で折り紙を作ったのを覚えてくれています。そのために見本の折り紙を作ったり説明書を作ってみたりしています！ クリスマス休暇にはホストファミリーと一緒にニューヨークに行きました。合計で7日間ニューヨークを楽しみました。本当に今までホームアロンを見てずっと行きたいなって思っていたのでとても楽しかったです。しかしその途中、検査はしてないのでわからないのですが、インフルっぽいのになってしまっただけで体調を崩してしまいました。旅行中だったので結構辛かったですけど、今はだいぶ元気になりました。また、私のホストファミリーがニューヨークの旅行の後にスペインに帰ってしまったので、今まで暇があればずっと話して遊んで感じてたのと重なってまたホームシックになり、年末はきっと日本に帰りたいって思っていました。でも、学校が昨日から始まって朝友達と会った時にみんなが私たちがいるから大丈夫だよって言ってくれて本当に恵まれてるなって思いました。また、1月の終わりに新しい中国からの留学生が来るのでそれを楽しみに頑張りたいです。日常会話の英語はだいたいわかるようになってきたのですが、英検を解くとわからない単語が本当にたくさんあるので英検勉強も今月はできたらいいなと思っています。これからもまだまだやることたくさんありますので頑張ります。



吉田千紘 1月レポート

サマリー



1月になり、二学期が始まりました。ほとんどのクラスは変更無しですが、ギターのクラスはバンドに、ストレッチのクラスは運動の授業に変更しました。特に運動の授業は教室にコミュニティセンターがあり、時間があればコミュニティセンターで運動することができるので楽しいです！1月の頭には国内最大の水族館に行きました。大規模な施設ですが、海に隣り合いも無いアメリカの内地にあるので、展示のバラエティーがあまりなく、規模が小さい大洗水族館の方が良いと思います。来年度、来年の授業の選択に向けて、(私には関係ないですが)どんな授業があるのか校内を見て回りました。だいぶ大きな学校で、学校内で職業体験ができるほど授業の種類が充実していました。

水族館

ミズーリ州・スプリングフィールドにある“Wonders of Wildlife National Museum & Aquarium”はアメリカ国内最大(と水族館が豪語している)水族館(兼・動物園?)です。国内最大とあるだけあって土地の面積は33,000平方メートルのかなり巨大な施設で、水族館だけでなく、動物園やアウトドアジョypも兼ね備えています。最初に驚いたのは、水族館の展示の仕方で、水槽に囲まれているような魚をひたすら見る、という感じではなくオブジェみたいなのが水槽の敷より多かったです。そのオブジェが立体的で迫力があります。最初は美術館にきているのかと思いましたが、(??)エーのふれあいコーナーでは、海水の匂いではないのかか真について、めちゃくちゃ臭かったです。海に面している州ではないので、新鮮な海水と頻繁に取り替えられないことが原因だと思いました。



運転の授業

二学期から運転の授業を取りました。アメリカでは16歳から運転でき、そのため高校の卒業に必要なクラスに運転の授業が含まれています。私はただ面白そうなので取ってみました。主に授業は筆記とシミュレーターの2つに分かれます。筆記では運転の際には守らなければならない法律や、その内容、道路上のサインの意味、車の運転するのに使う道具の名前や使い方を学びます。シミュレーターでは実際の勉強が終わった人から順次できる仕組みです。シミュレーターでは実際にアクセルやブレーキ、ハンドルを使ってなんとなくの運転の雰囲気を感じていきます。合計3回、実際の車に乗って運転する練習をします。今はオートマチック車で練習していますが、いつかマニュアル車も運転できるようになりたいです^_^



授業を紹介する授業

私の通う学校は結構大きな学校で、卒業が近い学年になるとききたい職業に向けて実用的な力をつける目的のクラスがいくつもあります。普通の校舎とは別に、WCC (Waynesville career center) という建物があり、そこで授業が行われます。私の学年はまだ下のほうなので、来年度WCCのクラスを取る人が多くいることが予想され、どんなクラスがあるか見に行く時間がありません。近くに軍事基地があり、ミリタリーサポートも結構あると思うのですが、それでも日本の高校とは比べ物にならないくらい施設が充実しています。接続クラス、自動車点検(エンジンオイル系と外装)、コンピュータサイエンス、プログラミング、看護、美容、デザイン、プリント、金融関係、ビジネス、動画制作など多岐にわたります。高校の授業としてみんな普通に受けているのが衝撃的でした。動画制作のクラスにはニューススタジオや生中継車もあり、見学が楽しかったです。



3.2 海外大学進学

・WWL 海外大学体験研修（マレーシア・シンガポール研修）視察報告書

日時 視察日程：2024年8月27日～8月31日

視察者 野上 泉、大川 洋

目的

令和7年度から WWL の事業として中等後期課程生（高校生）と連携校生徒を対象に実施予定の「マレーシア・シンガポール研修」の準備。現地の教育施設や文化体験、宿泊施設、観光地を視察し、研修の具体的な内容を検討することを目的とする。

視察内容

1. 大学視察

● マレーシア

・テイラーズ大学：マレーシアのトップクラスの私立大学。留学生が多く、日本人留学生も 35-40 人在籍。英語が第二言語として使われる環境で、非ネイティブにも学びやすい。入学に必要な英語力、卒業後の就職やビザ、学費や奨学金についても詳細に話を聞くことができた。研修では、大学生との将来のキャリアについての話し合いや、興味のある学部の体験授業を行うことが可能。研修の行きやすい時期は7月半ば～8月半ばと12月の1～3週。

・プトラ大学：マレーシアで2位の国立大学。農業、生命科学、環境分野に強い。海外の高校生の研修を多く受け入れており、複数日にわたる研究分野に関連した研修が可能。マレーシアの歴史や伝統文化を学ぶ見学も推奨される。

・サンウェイ大学：財閥が運営する施設設備が充実した大学。留学生センターが24時間体制でサポート。トップレベルの学者が多く在籍し、研修では将来の学びに繋がる内容で大学生との交流を行う予定。

● シンガポール

・シンガポール国立大学 (NUS)：世界8位、アジア1位の大学。広大な敷地と多様な学問分野をカバー。研修では、世界トップレベルの学生とのディスカッションを通じて、生徒の視野を広げる内容を計画。SDGs を実践する国としてのシンガポールの政策について学ぶ機会も持つ。

2. 宿泊場所の視察

◇ マレーシア：ホテル宿泊を予定。高額ではなく、安全で清潔な宿泊施設を確認。

◇ シンガポール：

・Hwa Chong Institute Boarding School：最大1000人が滞在可能な大規模な寮。男女別棟でセキュリティも充実。4人部屋と2人部屋があり、共用のトイレとシャワーがフロアごとに設置されている。

・早稲田渋谷シンガポール校学生寮：一人部屋が提供され、長期休暇中に利用可能。食堂も充実しており、生徒に好評。

*シンガポールでは、ホテルが高額になるので2泊を寮、1泊を移動に便利なホテルにする予定。大学の寮は一般に開放していないため、高校の寮を視察した。宿泊費は、Hwa Chong<早稲田<ホテル。

3. 観光地候補視察

● マレーシア

・ブルーモスク：イスラム教文化を学ぶための訪問。その他、プトラジャヤのピンクモスク、ムルカデ広場、国家記念塔、バトゥ洞窟なども候補。

● シンガポール

- ・チャイナタウン：シンガポールの歴史を学ぶための訪問。
- ・マーライオン：シンガポールの象徴的な観光地。
- ・マリーナベイ・サンズ：観光名所の一つ。
- ・ガーデンズ・バイ・ザ・ベイ：持続可能性をテーマとした植物園。

4. その他

・One&Co：JR 東日本シンガポールが運営するコワーキングスペース。研修としてプレゼンを行うことも可能。

視察の成果

- ・教育施設の評価：研修先として適切な環境であり、生徒たちが多くの学びを得られると確信。日程と研修内容の兼ね合いで精選する必要がある。
- ・文化体験の質：生徒に多様な文化に触れさせる絶好の機会となる。
- ・宿泊施設：安全性、快適さともに高評価。
- ・食事：多様な食事の選択肢がある。

今後の課題と対応策

1. 現地スタッフとの連携：定期的な連絡を取り、現地の最新情報を収集する。
2. 生徒の安全管理：緊急時対応マニュアルの作成と、現地病院の位置確認。
3. 予算の見直し：視察結果を踏まえ、研修の詳細な予算を再検討する。

まとめ

今回の視察により、令和7年度以降の「マレーシア・シンガポール研修」の具体的なプランを立てることができた。多様性あふれるマレーシアと持続可能な発展を続けるシンガポールでの研修は、生徒たちの視野を広げ、未来へ向けた考え方に大きな影響を与えると確信した。多くの生徒にこの研修に参加してもらい、将来の学びやキャリア形成に役立ててほしいと考えている。



3.2 海外大学進学 [留学課程のある大学との交流①]

・国際教養大学 視察

日時：令和6年5月24日（金） 視察者：岡田新司、野上泉

【大学の特徴】

国際教養大学（秋田県秋田市）は2004年に開学した、「すべて英語の教育」「全員留学」が特徴の公立大学である。「グローバルリーダー」の育成を目指している。

【教育の充実】

- ・THE 日本大学ランキング（2023）で総合15位、教育充実度2位。
- ・学部生約800人と規模の小さい大学。学生と専任教員数の比14：1。学生数が20人未満の授業73.3%
- ・就職決定率100%。有名企業に続々と就職している。有名企業が大学に来て説明会を開いたり、その場で採用をしたりしている。海外の大学院に進学する学生も多い。
- ・施設がとてもきれいで充実している。24時間開館の図書館が有名。寮も新しくきれい。

【グローバル教育】

- ・英語による教育100%、留学生の割合4人に1人、外国人教員の割合56.1%、海外の提携大学数（交換留学）51か国、203大学。
- ・大学1年目は、英語で学ぶための英語力をつける「英語集中プログラム」を受ける。全員が寮生活を送り、多様な異文化と出会い共生する。
- ・リベラルアーツ教育であり、入学時に専門を決める必要はない。専門領域としては、「グローバル・ビジネス領域」「グローバル・スタディーズ領域」「グローバル・コネクティビティ領域」がある。
- ・1年間の留学が必須。世界トップレベルの203大学から第6希望までを出してマッチングを行う。交換留学のため、国際教養大の学費（年間696,000円）で留学ができる。

【入試】

- ・最大6回の受験チャンスあり。
- ・公立大学であるが、前期後期日程ではなく、独自日程（A/B/C日程）なので国立大学との併願が可能。
- ・高3夏休みに大学が開催するグローバル・ワークショップに参加した人だけが受験できる「グローバル・ワークショップ入試」という入試があり、国際教養大学を第一希望にする人は、これから受験を開始するとよい。
- ・英検準1級を持っていることで総合型入試の受験資格が得られたり、一般入試で共通テストの英語が満点扱いになったりなど特典がある。英検準1級以上を取るようにしたい。

* グローカルリーダーの育成を目指している本校の生徒と国際教養大学の教育は相性が良いと思いました。教育内容も施設設備も魅力的で、生徒・保護者にこの大学について周知できれば、進学希望者は確実に出てくると思います。英語で教育を受けたい人、留学をしたい人には最高の大学だと思います。立地がかなりの田舎で、勉強に打ち込める環境です。

3.2 海外大学進学 [留学課程のある大学との交流②]

・立命館アジア太平洋大学 (APU) 視察

日時：令和6年3月14日（木） 視察者：大川洋、加藤浩一

立命館アジア太平洋大学（以下 APU）は、2000 年に開学した比較的新しい大学であるが、世界約 106 か国から留学生を迎え、6000 人いる学生の内、約半数が国際学生である。授業も生徒の英語習得レベルごとのクラス編成になっており、科目によっては同一科目が日英 2 言語で開講されており、TOEFL iBT 61 以上のスコアを持つ生徒は、同科目を、英語教員が担当している授業の方で履修することが可能である。留学制度も充実しており、海外の大学に 2 年間留学し、4 年間で AP と留学先の大学 2 つの学位を追加学費不要で取得できる共同学位プログラムをアメリカ、フランス、オーストリアなど世界 169 大学・機関と結んでいる。

1 年生はほぼ全員が AP ハウスとよばれる寮に入寮し、一人ひとりが海外留学生とバディを組み、同じ部屋で共同生活を送ることで、英語だけでなく、異文化コミュニケーション能力を向上させることができる。（室内は鍵付きドアで完全に仕切ることができるので、同じ部屋内といっても寝室などは完全に別で、プライベート空間は確保できる仕様になっている。）次の 1 年生が入ってくるので、春に AP ハウスを退寮したあとも、バディと一緒に新しい部屋でルームシェアを続ける生徒もいるそうです。

卒業後の進路も多様で、培った英語力で国内外の英語力が求められる企業への就職に強いが、国内外の大学院進学や、在学中に身につけた課題解決能力を生かし、NGO/NPO などへの進路も多く見られる。



写真提供（立命館アジア太平洋大学）

3.3 グローバルゼミ

・チャレンジプログラム グローバルゼミ（中等3，4年次）について

チャレンジプログラムは、探究学習を通して、思考力や判断力、表現力や主体的に学習に向かう態度の育成を目的とする授業です。グローバルゼミでは、中4では全体のプロジェクトとして茨城大学と共催の「防災運動会」の実施とカンボジアの大学生との交流を行い、個人探究として、第二外国語学習や留学準備、コンテスト出場などに向けた準備などを各自行いました。中3では韓国語・中国語体験と、茨城大学の学生・留学生とともに「多様な生徒が集う理想的な学校とは」というテーマでプレゼンテーションを行いました。

中等3年次	5～7月	第二外国語体験（韓国語・中国語）
	9～2月	多様な生徒が集う理想的な学校とは」をテーマに探究
	12月	探究デイ（JICA 筑波、水海道中学校、常総市スリランカコミュニティ訪問）
	2～3月	探究フェス準備
	3月12日（火）	探究フェス
中等4年次	4月～	個人探究開始（日本語教室ボランティア、第二外国語、コンテスト参加、留学準備など）
	7～12月	「防災運動会」にむけた話し合い、準備
	12月8日（日）	「防災運動会」実施
	*1月23日（木）	の IBARAKI ドリームパスプレゼンテーション大会で「防災運動会」のプレゼンが金賞受賞
	1～2月	カンボジアのアジアイノベーション大学との交流準備
	2月17日（月）	アジアイノベーション大学と交流
	2～3月	探究フェス準備
	3月12日（火）	探究フェス

・防災運動会の開催

4年C組 紀井 晴道

1. 防災運動会の目的

- ・地域に住む外国人と日本人と一緒に楽しみながら、災害に対する準備や災害時の対処法について学ぶ。
- ・外国の方が災害時に使用する言語を学び、災害時に外国人が現地の人々とのコミュニケーションを円滑化し、迅速に対応できるようになる。
- ・外国人と地域の人が交わり、コミュニケーションの場を作ることによって、交流の輪を広げられ、多文化理解を促す。
- ・多文化共生社会の実現に貢献し外国人と日本人の隔たりのない地域コミュニティの形成。

2. 防災運動会の概要

- ・日時：12月8日(日) 13:30～16:00
- ・場所：勝田中等教育学校 体育館
- ・参加者数：外国人40人、日本人90人 計130人
- ・主催者：勝田中等教育学校、茨城大学



3. プログラム内容・実施状況

- ・伝言ゲーム：災害に関する用語を覚え、災害時に使えるように伝言ゲームを行い、その後地震・台風の知識をスライドを使い確認した。

- ・原子力クイズリレー：原子力に関するクイズに答え、正解したら次の走者にバトンを渡す形式のリレーを行った。クイズによって外国人の参加者も日本人の参加者も原子力についてさらに知ることができた。



- ・警報音クイズ：様々な災害時に耳にする警報音についてのクイズを行った。また、警報音が鳴ってからどんな行動をするべきか学んだ。



- ・障害物リレー：土のうを運んだり、防災頭巾をかぶったりしながらリレーを行った。防災時に使われるものを実際に触れることで、実感がわいた。

- ・段ボールベット作り・新聞スリッパ作り・担架体験：避難所での生活を体験した。作り方を覚えたので、実際の避難所でも役に立つと思った。



- ・非常食の試食：避難所で配布されるアルファ米を試食した。水を入れるだけなので簡単だし、たくさんの方が美味しそうに食べていた。宗教上の制限などにも配慮し、ハラル認承の非常食を提供したり、食材を提示したりした。

4. 成果・評価

- ・参加者の96%が、防災運動会が「とても楽しかった、楽しかった」と回答した。
 - ・外国人参加者の91%が、不安が減ったと回答した。
 - ・日本人参加者の90%が、地域の外国人と話しやすくなったと回答した。
 - ・外国人参加者の88%が、地域の日本人と話しやすくなったと回答した。
- 上記の結果から、このイベントにより外国の方と話すことへの抵抗や防災に対する恐怖感が減ったと感じた。

5. 課題・改善点

- ・受付から予定通りにいかず、時間がおしてしまった。
- ・競技の多くが複雑で、ルールを理解できなかった方が多く見られた。
- ・「やさしい日本語」を使ったつもりだったが、伝わりにくい部分があった。
- ・段ボールベッドや新聞紙スリッパの作り方が説明不足だった。
など多くの課題や改善点があった。

6. まとめ

防災運動会を通して地域の方々と交流する楽しみを感じた。また、外国人と一緒に防災について学ぶことで交流の輪ができた。実際に災害が起きて外国の方と一緒に過ごすことになった場合も、今回の防災運動会の経験を生かしたいと思う。また、来年度も同じようなイベントが開催される場合は、積極的に運営に参加し、地域コミュニティを活発にさせたい。

・防災グローバルリーダーズとして活動をして

4年B組 尾方 心

1. 防災運動会にかけた思い

防災運動会を通じて、地域に住む日本人、外国人に楽しみながら防災意識を高めてもらいたいと思い企画しました。私を含めた防災グローバルリーダーズを中心に運営を行い、競技を工夫しながら実践的な知識が身につくよう心がけました。たくさんの方にご協力いただき、この取り組みが助け合える地域づくりの一歩になったと感じています。

2. 苦勞したこと・感謝したいこと

- ・チームをまとめる難しさ

競技準備には、勝田中等教育学校の生徒 25 人、茨城大学の学生や留学生、日本語教室に通われている外国人の方々にご協力いただきました。しかし、大人数の意見を反映しながら、一つの方向性にまとめることは簡単ではありませんでした。試行錯誤を重ね、話し合いを重ねることで、全員が納得できる形に仕上げることができました。

- ・部活や学業との両立

このイベントの企画から運営までにかかった期間は、6月から12月の約6ヶ月間。この間にテストや部活の大会などが重なり、準備時間を確保するのが大変でした。特に直前は夜遅くまで運営計画の調整を行いながら、限られた時間の中で準備を進めました。多くの時間をかけて取り組んだからこそ、無事に成功させることができたのだと思います。

・参加者の募集

最も苦労したのは参加者の募集でした。特に外国人参加者の募集については、初めはどのようにアプローチすればよいかわからず、なかなか集まりませんでした。そのため、広報用のチラシを日本語教室や近隣の小中学校、外国人料理店などに配布し、学校の先生方や関係者の方々にもご協力いただきました。結果として、多くの方に参加していただくことができ、本当に感謝しています。

3. IBARAKI ドリーム・パス

IBARAKI ドリーム・パスは、茨城県内の高校生が地域課題解決や夢の実現に向けて企画・実践し、アントレプレナーシップを育成する事業です。防災グローバルリーダーズは応募数745チームの中から16チームに選ばれ、研究費として10万円をいただきました。

この資金を活用し、競技の準備だけでなく、非常食の購入や広報活動の充実にも取り組むことができました。さらに、1月に行われた最終プレゼン大会では金賞を受賞し、研究継承費用として賞金30万円をいただきました。この賞金は、次回以降の防災運動会をさらに発展させるために活用する予定です。

4. 将来への展望

防災運動会を通じて、日本人と外国人が交流できる場を作ります。継続的に開催し、防災運動会を街の文化として根付かせることで、ひたちなか市を多文化共生のコミュニティにしていきます。そして、ここから誰もが安心して暮らせる社会を広げていきます。



防災グローバルリーダーズの4人
岡崎さん、尾方さん、石川さん、石澤さん
(左から)

3.4 グローバルゼミ

・グローバルゼミ（3年次未来探究）

中等3年次からは、1，2年次に取り組んできた「地域探求」を深化させ、「夢探求」が始まります。生徒は各自の興味・関心をもとに4つのゼミから1つ選んで所属します。その中の1つ、グローバルゼミではその名の通り、地域が抱えるグローバルでありローカル（地域）でもある、グローバルな課題の発見、解決について深めていきます。

その中の取り組みの1つに、英語以外の第2言語習得入門があります。生徒は中国語、韓国語に分かれ、ネイティブの先生たちに全6回にわたり、中国語・韓国語講座を行ってもらい、それぞれの言語で基本的な自己紹介ができるまで練習します。最終回の合同発表会では、ネイティブの先生たちもびっくりするほど上達します。

後期は、茨城大学の瀬尾クラスと合同で、多様な生活背景を持つ生徒たちが安心して暮らすことのできる「理想の学校」について考えていく課題解決型の学習に取り組んでいきます。「探求デイ」においては、県内で最も小中学校におけるクラス内の外国籍生徒の割合が高い、常総市の水海道中学校を見学させていただき、同校の取り組みなどを学ぶことで、「理想の学校」について考えるヒントをもらいます。その他にも、JICAつくばにてJICAの役割や世界における日本の役割のお話を聞いたり、常総市のスリランカ寺院の見学など、1日のグローバルツアーを通してグローバルな感覚を身につけていくことができました。



3.5 海外との交流・研修

・グローバルデイ（インド・デイ）

5月14日（火）にグローバルデイを開催しました。

グローバルデイは、留学や海外研修、海外大学進学などについての情報を保護者・生徒に提供するために本校が年に2回行っているイベントです。

今年のグローバルデイは、インドについて学ぶINDIA DAY。「これからはインドの時代」といろいろなところで耳にしますが、生徒たちにとってインドはまだ未知の国です。この日はインド大使館の文化センターのカニカ所長さんをお迎えして、インドの歴史や文化についてお話を聞きました。大使館から生徒全員にインドの漫画のプレゼントもありました。お話のあとは、 Bollywoodダンスの講師の方から Bollywoodダンスを教わりました。生徒たちはあっという間に踊りをマスターしていました。また、高校生、中等後期生はインドのヨガを教わり、みんなで心身ともにリフレッシュができました。中等前期生はこの日は給食はインドメニューで、カレーやサモサなどインドの食文化も体験できました。

歴史的にも仏教など日本に大きな影響を与えているインド。遠いようで近いインドに親近感を抱いたグローバルデイでした。



3.5 海外との交流・研修

・令和6年度オーストラリア研修実施報告

1 目的

海外交流校（Broadford Secondary College）での授業参加（外国語科（日本語））及び教育・文化施設の視察を通して、異文化に対する理解を深めるとともに、英語によるコミュニケーション能力の育成を図る。

2 派遣期間

令和6年7月25日（木）～8月2日（金）

3 派遣地域

オーストラリア（メルボルン、ブロードフォード、シドニー）

4 訪問校

Broadford Secondary College
Broadford 3658, Victoria, Australia



5 研修内容

- (1) 交流行事（訪問校の日本語クラス、ホームステイファミリー、その他の生徒との交流）
- (2) 授業（日本語クラス）参加（本校生徒による日本紹介のプレゼンテーション等）
- (3) ホームステイ（7月27日～7月31日 4泊4日）
- (4) 視察研修（メルボルン市内、シドニー市内等）

6 派遣人数

高校2年生 8名（男子3名女子5名）
中等3年次生 12名（男子8名女子8名）

7 派遣費用

32万円程度

8 研修生を決定するまで

- 1月：上旬 募集開始 下旬 参加希望の生徒・保護者に向けた説明会
- 2月：中旬 研修生選考会（筆記試験・面接・作文） 下旬 研修生決定・通知
- 3月：中旬 第1回保護者会、事前研修開始
- 4月～7月 事前研修（毎週）
- 9月10月 事後研修（毎週）

9 研修の実際

(1) 事前研修

自己紹介、家族紹介、プロフィールの作成、場面による英会話
日本紹介のプレゼン準備、個人探究のテーマ作り

業者によるオーストラリアの紹介、ホームステイのQ&A

(2) メルボルン視察（ガイドによる団体行動）

セントパトリック大聖堂、キャプテンクック生家等視察

(3) 授業への参加



- ①日本紹介 武道、折り紙、アニメ、スナック等4人グループでプレゼンテーション
- ②自己紹介・ホストファミリーと日曜日にしたこと等について、ブロードフォードの生徒と聞き合う
- ③好きなことについて書いた英文をブロードフォードの生徒に読んでもらい、感想をもらう
- ④ブロードフォードの生徒の日本語を使った話を聞き合う（完了形経験「～したことがある」）

(4) ホームステイ

(5) シドニー班別自由研修

シーライフシドニー、水族館、ワイルドライフシドニー、QVB、ルナパーク等

(6) 事後研修

- ①個人探究レポート
- ②授業参加・ホームステイについてのまとめ
- ③シドニー班別活動についてのまとめ

(7) 研修の成果と課題

「もっと英語がスムーズに口に出てくるくらいに上達したい。そのためには、これまで以上に勉強する」と、高2年生が言っているのが印象に残った。個人探究のテーマの決定を通して、事前に興味をもてる課題をもたせる工夫をしたい。

3.5 海外との交流・研修

・豪華客船おもてなし事業

常陸那珂港（茨城港）は東京都心から直線距離で100kmという好立地にあります。東京湾や横浜港からのクルーズ船の立ち寄り場所としても適していることから、毎年世界中を旅する大型クルーズ船の立ち寄り先になっています。そこで茨城県、ひたちなか市は観光PRの場として、本校を含む地域の中高生にとっては、海外からの観光客をもてなすために普段の授業で身につけた英語力を発揮する絶好の場面として参加しています。

今年度も、世界的に有名なダイヤモンドプリンセス号と、セブンシーズエクスプローラー号が入港した際に、本校からも希望者合計約30名の生徒たちが参加しました。

初参加の生徒たちは、まずクルーズ船のそのあまりの大きさに驚きます。いざ下船が始まると、観光客だけではなく、船内で働いている従業員の方々も、休憩時間に出てきて生徒たちと交流を持ってくれることもあるので、生徒にとっては「こんな世界を旅する仕事もあるのか」と自身のこれからのキャリアを考える上での一助になっています。生徒たちは、最初はどうしても自分の英語が本当に通じるのか？と自信がなく、目の前をどんどん観光客が素通りするのを見ているだけですが、徐々に勇気を持って話しかけることができるようになります。中には初めてあったとは思えないほど意気投合して、彼らのセルフィーに写ったりする生徒もいます。生徒たちは英語を使う環境さえあれば、本当に自分たちの殻を破っていくことができることを教員としても実感します。



3.5 海外との交流・研修

・オーストラリアの高校生とのオンライン交流について

中等4年次生がプラットフォーム「オントモ」を用いて、オーストラリアの高校生とオンラインで交流を行った。英語と日本語を用いてコミュニケーションを取ることでお互いを知り、またそれぞれの外国語学習に役立てることができた。今回はお互いの自己紹介や学校、地域の紹介をし、互いに質問をし合った。Ravenswood 高校はシドニーにある女子高、Broadford Secondary College はメルボルン近郊のブロードフォードにある公立の中高一貫校で、勝田高校・中等教育学校が夏休みの研修で約30年間交流を続けている学校である。

9月25日（水） 4年A組 Ravenswood 高校と

10月30日（水） 4年C組 Ravenswood 高校と

11月6日（水） 4年A組 Broadford Secondary College と

11月14日（木） 4年B組 Broadford Secondary College と



3.5 海外との交流・研修

WSC（ワールドスカラーズカップ）への参加 ①

4年C組 久下沼海

[参加期間]	[参加人数]	[訪問場所]
令和6年7月24日～8月1日	(3名参加)	韓国・ソウル
令和6年11月13日～11月23日	(1名参加)	アメリカ合衆国・コネチカット州・イエール大学

韓国で行われた WSC 世界ラウンド韓国大会に上田さん佐竹さんと共に参加し、イエール大学で開催された決勝大会に進出しました。英語ディベートや教養を問うクイズ事前課題に基づいたテストで競い合ったものの歯が立たず、世界の壁の高さを実感しました。また世界中から集まった精鋭たちと仲を深めることができ自分の視野が広がり非常に良い経験となりました。



WSC（ワールドスカラズカップ）への参加 ②

4年A組 上田 千代

私たちは、2024年7月26日から31日まで、韓国ソウルで開催された World Scholar's Cup のグローバルラウンドに出場しました。World Scholar's Cup とは、世界中の小中高生が英語で様々な教養を競う大会です。毎年テーマが決まっており、今年のテーマは”Reimagine the Present”で、その中でも更に、歴史や音楽、科学など多岐にわたる分野がありました。本校からは3人の生徒が参加しました。4月末に東京で行われた国内大会を突破し、ソウルでの本大会に参加、内1名はさらに11月にイェール大学で開催された決勝大会まで進みました。

本大会には4つの競技があります。まず、Collaborative Writing では、問いについての自分の意見を文章で表現しました。通常のエッセイとは異なり、擬人化して物語風にしたりと、日記風にしたりとクリエイティブに書く力が身につきました。Team Debate では、議題について賛成反対に分かれてディベートを行いました。豊富な知識やジェスチャーなどを使って流暢に話す参加者たちを見て、自分に足りないスキルに気づき、見て学ぶことができました。



Scholar's Challenge では、予習範囲からのマーク式テストを、Scholar's Bowl ではクイズを行いました。どちらも分野の範囲が非常に幅広く難しかったですが、自分の得意分野、私の場合は音楽で予習の成果を発揮しました。WSCには競技以外にも、韓国ツアーやダンスパーティーなどの交流イベントがあります。私が特に印象に残っているのは、各国でブースを出して文化交流を行った Cultural Fair です。日本のブースでは折り紙を折ってみせたり、参加者の名前を習字で書いてあげたりして、日本の文化を伝えることができ嬉しかったです。また、他の国のブースを回って、インドネシアの被り物をもらったり、ケニアのお菓子を試食してみたりと、貴重な体験をし、さらに様々な国の人とのコミュニケーションを楽しむことができました。また、大会の最後にはタレントショーがあり、日本チームでソーラン節を踊り、日本の文化の良さを改めて感じました。

私がこの大会を通していちばんに感じたのは、自分の英語力がまだまだ足りないことです。私は英語を頑張ろうという気持ちで参加したのに対し、他の国の参加者たちは英語が母語でなくても英語が話せるのは当たり前で、その先の知識で勝負しようという気持ちを持っていて尊敬しました。文化交流や競技以外での会話などでは外国について知るきっかけになり、普段は全然関わることのないケニアなどアジア以外の人たちとも交流することができて自分の世界が広がりました。また、生まれた国やバックグラウンドが異なっても、競技で競って、ご飯を共に食べて、お互いの国について話して笑い合えることを学びました。



World Scholar's Cup は、英語力向上や学力向上だけでなく、自国理解や多文化交流の面で大いに成長できる最高の機会になりました。

3.5 海外との交流・研修

・全国高校生フォーラム報告書

4年B組 雨谷奈々

日時：2024年12月15日 10:00～16:00
場所：国立オリンピック記念青少年総合センター
内容：生徒交流会、ポスターセッション

私は、昨年12月、全国高校生フォーラムに同級生と共に4人で参加しました。全国高校生フォーラムでは、大きく2つのラウンドに分かれて、国内外の高校生と共に、日頃の研鑽の成果を共有し、地域や世界の課題を議論しました。

1つ目のラウンドでは生徒交流会があり、参加者は6つの部屋に分かれ、私たちは英語でwell-beingの定義に関するディスカッションを行いました。私は「well-being」の中でも、physicalというテーマを選びました。グループメンバーは全員留学経験者で、英語が流暢だったためとても不安でしたが、メモを取る担当を引き受けました。議論を図式化しながらメモをとっていると、ファシリテーターの大学生から褒められ、とても嬉しかったです。ディスカッションでは、well-beingの重要性を深く掘り下げ、physicalが最も基礎的なパーツであると確信しました。また、他の側面とも関連づけながら、達成するにはどうしたら良いかについても話し合いました。ディスカッションを通じて非常に貴重な経験を得ることができました。また、ディスカッションで同じグループだったメンバーは、目標であり憧れとなりました。

2つ目のラウンドではポスターセッションが行われ、私たちは防災運動会についての発表をしました。防災運動会の実施から全国高校生フォーラムまでの期間が短く、約1週間でポスターを作成しましたが、自分たちが納得できるクオリティーのものを感じています。他校の人たちも同じ空間で発表を行なっているという異質の雰囲気、緊張感がありましたが、チームで助け合い、無事に終わることができました。審査員からは防災運動会を実際に行なったことに対して興味を持ってもらい、手応えを感じました。

しかし、他校の発表は圧巻で、ポスターセッションの後に発表された決戦進出校に、私たちの学校の名前はありませんでした。とても悔しかったです。来年のリベンジを誓って、ポスターセッション決戦を観に行きました。決戦では、実際にラオスと何年も交流しているという学校や、女性の社会進出や育児の課題といった世界中で問題となっている壮大なテーマに立ち向かっている学校、私たちと似た日本に住む外国人に対する方策について発表している学校もあり、悔しさを再実感すると同時に、私たちのポス



ターにしかないオリジナリティーはあったらどうか、など見直すきっかけにもなりました。

このように、全国高校生フォーラムでは、憧れの人たちを見つけることや世界を視点に議論できたこと、国内外の高校生の高レベルな研究成果を聞くことができ、とても良い刺激になりました。そして、ここで体感した自分の英語力の未熟さや、ポスター発表のクオリティの未熟さを忘れず、また1年後の全国高校生フォーラムへ向けて再出発したいと思います。



3.5 海外との交流・研修

・サマーキャンプへの参加 ① ～ニューヨークでの新たな経験～

4年C組 西野 光

私は7月23日から7月30日の約1週間、全国から集まった計19人の中高生と、2人の日本人の添乗員さんと共にニューヨークに滞在しました。コロンビア大学の学生寮に泊まり、仲間とともに快適な生活を送ることができました。1日目に訪れた国連本部では、国連がどのような働きを担っているのかや現在の世界の状況について詳しく説明してくれ、経済や世界情勢に対し、新しく興味関心を向けるようになりました。

その後、現地の大学の先生や学生の方々と何度かディスカッションする中、アメリカの文化や多角的な考えなどを学ぶことができ、自分の考えを深めるとてもよい機会を得ることができました。また、ネイティブの英語を聞くことができ、自身の英語力上達にもなりました。コロンビア大学の学食では様々な食べ物やフルーツなどをビュッフェ形式で食べることができ、日本とは全く異なる具材や味付けがとてもおいしかったです。そのほかにもアメリカの地下鉄に乗ったり、タイムズスクエアに訪れたり、様々な経験をすることができ、とても充実した日々を過ごすことができました。また、28日のグループでの自由行動では、メトロポリタン美術館や自由の女神、広いショッピングモールに訪れ、有名な建造物や絵画、ユニークな服やお菓子など日本には見られないたくさんの珍しいものを目にする事ができ、新鮮な経験をすることができました。言語の壁があったり、多少のトラブルが発生したものの、多くの素晴らしい知識や経験を獲得し続けながら1週間で仲間たちと過ごし、日本に何事もなく無事に帰ることができよかったです。今までの私の人生の中でこの1週間は強く印象に残る、とても貴重な時間でした。



・サマーキャンプへの参加 ② ～カナダ研修レポート～

4年C組 小澤 慶大

僕は約1カ月カナダのバンクーバーのデルタ地区というところにホームステイしていました。写真はホストファミリーと会ったときにはじめて撮った写真です。この時期カナダは夏だったので、日本ほどではありませんが、現地は25℃くらいで少し暑かったです。カナダではホストファミリーが優しく接してくれたおかげで会話の中で英語を学ぶことができました。



僕の場合はホストファミリーがすごくいい人達で、ホストファミリーにたくさん助けられ、またホストファミリーのおかげで英会話がとても上達しました。



カナダではホストファミリーとずっといるわけではなく、学校に行くこと以外は基本的に自由です。このカナダの研修で僕がいちばん感じたことは、自分からチャレンジしないと結局カナダにいても意味のある経験にはならないということです。この研修のいちばんいいところは、『自由に活動できる』ということです。色々なところへ自分で行き、できるだけ会話すること、カナダの文化や空気に触れることを第一に行動して

いました。また、ホストファミリーとの日常会話がしみついてくると自分の英語のレベルが上がったと感ずることが出来ます。これがいちばんの自分の成長を感じるところでもあります。このカナダ研修で僕はとても貴重な経験をする事が出来ました。この『チャレンジ』をしたということが、いちばん僕の経験値となったものだと思います。

3.5 海外との交流・研修

・茨城県高校生フォーラムへの参加 ～高校生平和大使として～

4年B組 田口 七望

1. 活動の目的

高校生平和大使としてこれまでの活動を高校生フォーラムで報告し、参加者に平和活動への関心を高めてもらうことを目的として報告を行いました。平和の重要性を再認識し、共に平和に貢献する方法を模索することができる機会となりました。

2. 活動報告内容

高校生平和大使としての活動概要の紹介

高校生平和大使に任命されてからの活動の背景や目的について説明しました。また、平和教育や啓発活動、地域での取り組みを行ってきたことを紹介しました。

○具体的な活動内容

- ・広島研修（6月15日～16日）講演会、結団式
- ・長崎研修（8月7日～9日）講演会、慰霊碑献花、平和記念式典
- ・国連欧州本部訪問（スイス・ジュネーブ）（8月17日～24日）
署名目録提出、軍縮会議傍聴、日本政府代表部表敬訪問
- ・署名活動（月1）都内での署名活動

3. 今後の展望

高校生フォーラムでの経験を通じて、さらに多くの高校生と連携し、平和活動を広めていく必要性を再認識しました。現在、日本被団協のノーベル平和賞受賞から来年の被爆80周年へと核兵器廃絶の機運が高まっていながらも、「被爆者なき時代」が刻一刻と迫っています。そこで、新たな企画の開始を検討しています。今後は、オンライン・オフライン問わず、地域や学校での平和教育を強化し、具体的なアクションを起こせるような活動を推進していきたいと考えています。

4. まとめ

高校生フォーラムでの活動報告は、高校生平和大使としての活動を広める貴重な機会となりました。参加者からの意見を通じて、自分達の活動が他の高校生にも影響を与え、平和に対する意識を高める一助となったことを実感しています。今後も引き続き、平和活動を積極的に行い、多くの人々と共に平和を守るための行動を起こしていきたいと考えています。



3.6 国内先進校の視察

・金沢大学附属高等学校への視察研修実施報告

1 目的

WWLの先進校における「第34回高校教育研究協議会」に参加し、実践事例を参観するとともに、今後の本校における取り組みについて検討を図る。

2 訪問日

令和6年11月15日（金）

3 訪問校

金沢大学附属高等学校（石川県金沢市平和町1丁目1-15）

4 視察研修日程

- (1) 全体会（開会挨拶、大会趣旨説明）
- (2) 公開授業参観：高校1年「探究基礎」
- (3) 公開授業参観：高校1～2年「総合的な探究の時間」
 - ・各ゼミ活動参観
 - ・ゼミ合同中間発表会
- (4) 公開授業参観：高校1年「数学A」、高校2年「数学B」

5 訪問教員

額賀勇人（中等1年次、数学科）、岡田新司（中等4年次、数学科）

6 訪問校について

金沢大学の附属高校として、本校と同じ全校生徒360名（学年120名）規模の学校である。学年在籍の7割が附属中学校からの内部進学（残り3割が高入生）である。令和4年度まではWWL指定校であった。現在もグローバル人材の育成に取り組むとともに、自由な校風のもと「異才の育成」に取り組んでいる。

7 視察研修内容

- (1) 全体会（開会挨拶、大会趣旨説明）

開会挨拶に引き続き、学校概要の説明と今年度までの取り組みが報告された。総合的な探究の時間については、高1で2単位、高2～高3で1単位の計4単位で実施している。高1では金曜5限目に「探究基礎（1単位）」、また高1～高3で金曜6限目に縦割りで「総合探究ゼミ（1単位）」を実施している。

(2) 公開授業参観：高校1年「探究基礎」

「探究基礎」は、探究を進める上での基礎・基本を学ぶことをねらいとしている。

1学期は「先輩の探究に学ぼう」として、上級生の探究成果から全体像をイメージすることから始める。続いて、「探究の基本を学ぼう」において、探究活動に必要な概念やスキルについて学ぶ。2学期は「教員による研究論」にて実践的な探究力を具体例から学ぶ（本時は、数学教員による大学院での研究論文を取り上げていた）。3学期は1年間の活動成果を発表するためプレゼンテーションの質の向上をねらった活動を行う。



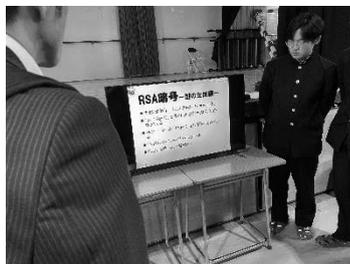
(3) 公開授業参観：高校1～2年「総合的な探究の時間」

・各ゼミ活動参観

校長、副校長および養護教諭を除く19名の教員が各々の専門性をもとにゼミを開講する。1年次に所属するゼミを決定し、在籍3年間に変更をせずに同一ゼミにて活動する。（本時は各教室で活動中の「数学作問ゼミ」「比較言語ゼミ」「スポーツ科学ゼミ」を参観した。）

・ゼミ合同中間発表会

合同中間発表会として、ポスターセッションおよびプレゼンテーションでの中間発表を実施する。（本時は、体育館での合同中間発表会を参観した。）



(4) 公開授業参観：高校1年「数学A」、高校2年「数学B」

いずれも担当教員の経験と知見に基づいた自作プリントにて授業が展開されていた。かなり高度な内容を含み、高いレベルの思考力と探究力が要求されるプリントであった。

8 研修の成果

学校としての教育目標や方針が共有されており、数学の公開授業参観においても、探究活動を軸とした教育課程が意識されていることを実感した。高1で2単位、高2～高3で1単位の探究については、今後の本校においても十分参考になるものであった。

3.6 国内先進校の視察

・福島県立ふたば未来学園中学校・高等学校

1 目的

WWLの先進校である福島県立ふたば未来学園を訪問し、校内組織の様子や未来創造学（中学での総合的な学習の時間）の授業の様子を知り、今後の本校の取組に生かす。

2 訪問日 令和7年2月20日（木）

3 訪問校

福島県立ふたば未来学園中学校・高等学校（福島県双葉郡広野町中央台1丁目6番3）

4 視察研修日程

13:00～13:45 学校説明 13:55～16:45 授業参観：「中学1年探究発表会」

5 訪問教員 上金紀子（中等教頭）、井川珠美（中等1年次）



6 訪問校について

ふたば未来学園中学校・高等学校は、文科省から「地域との協働による高等学校教育改革推進事業（グローバル型）」の指定を受け、原子力災害からの復興を果たし、新たな地域社会を創造するグローバル・リーダーの育成に取り組んでいる学校である。

7 視察研修内容

WWL 事業は、ふたば未来学園が拠点校となり、県内の高校、県外・海外の連携校の他、NPO カタリバ双葉みらいラボなどと事業協働している。NPO カタリバは校内に常駐し校内カフェの運営、探究の授業にも関わっている。組織は、「企画研究開発部」という部署が担当し、部長は高校の教員が、部員は各学年1名ずつで構成している。探究学習がカリキュラムの中心に位置づいており、各教科の指導も行っている。

変革者の育成として、道徳における哲学対話、演劇ワークショップ、リーダー学の授業がある。総合的な学習の時間は、それらの活動を生かしながら、中1では自分の出身地域と広野地区を個人で探究し、中2では地域の課題解決のために同じ関心をもつ生徒同士でグループを編成し探究する。グループ活動により合意形成の仕方についても学ぶ。

8 研修の成果

本校ではGCPの授業で合意形成の場面がある。訪問校の哲学対話、演劇、リーダー学などの活動の一部を教科・領域等の授業に入れ込み、効果的にならないかを検討したい。

第4章 グローバル人材育成指標

これからの社会は、変化が激しく将来の予測が困難な時代になっていくだろうと言われている。そのような中、本校では生徒たちにグローバルな視野と起業家精神を兼ね備え、自らの人生を切り拓いていってほしいと考えている。「地域」と「世界」をつなぐ役割を果たすグローバルリーダーの育成を目指し、そのために必要な「創造力」「活用力」「協働力」「挑戦力」の4つの力を重視している。これは、欧州において策定されたグローバル市民を育成するための枠組み Reference Framework of Competence for Democratic Culture (RFCDC) を参考として考えた力である。昨年度までに、この4つの力に「探究基礎力」を加えた5つの力(階層1)をさらに細分化し、17の資質能力(階層2)と、具体的評価項目(階層3)を定め、育成したい力を明確にした(表1)。

表1 グローバルリーダー資質表

階層1	階層2(資質能力)	階層3(評価項目)
探究 基礎力	情報検索	必要な情報を適切に集めることができる
	論文の書き方(Abstractの書き方含む)	的確な形式と文章で思考を表現できる
	発表の仕方(プレゼンテーション)	自分の考えを適切に発表し、共感を得ることができる
	議論の仕方(ディベート・ディスカッション)	多角的・実証的に議論を進め、生産的な成果を出すことができる
	統計の扱い方	収集した情報を適切に分析することができる
活用力	分析的思考力	ものごとを筋立てて考えることができる
	多言語・コミュニケーションスキル	母語以外の言語でコミュニケーションを図ることができる
	自律的学習	計画的に学習を進め、自分の学習を振り返ることができる
	自己分析認識	自分自身の意欲・傾向や行動を客観的に分析することができる
協働力	責任感	自分のとった行動に責任をもつことができる(周りのせいしない)
	多様な価値観	異なる文化や信条、価値観、習慣に対して敬意を払い、柔軟に接することができる
	共感	他者の気持ちを理解し、チームにおいて協力的な関係を創ることができる
	柔軟性・適応力	話し合いにより自分の意見を修正したり、状況により決断を変更したりすることができる
創造力	問題解決	正解のない課題に対し、冷静な視点で提案し、新しいものを創り出そうとする
挑戦力	企画を実現させる(アントレプレナーシップ)	自分の考えを様々な支援を受けながら現実化することができる
	何事にもチャレンジ	失敗を恐れず何事にもチャレンジしようとする
	自己効力感(I can do it)	(課題解決に向けた)自分の信念に自信をもち、それを表現することができる

【調査】

完成した資質表をもとに、生徒の意識調査を実施した。

(調査時期) 令和6年9月26日。

(調査対象) 中等1年次から中等4年次の生徒480名。(回収データ n=435)

(調査方法)

アンケートは google フォームを使用し、17の項目について1つ1つの意識について尋ねる質問と、17項目全体の中から特に優れていると思うもの、課題だと感じるものについて詳しく尋ねる質問とで構成されている。前者は、階層3の17の評価項目について5段階に重みづけをし、中等6年次の卒業の段階で「5. よくできている」とした時、現段階でどの程度身に付いていると思うかを「5. よくできている 4. 大体できている 3. どちらとも言えない 2. あまりできていない 1. できていない」の選択肢から自分に一番近い数字を選択してもらい形で回答をもとめた。後者は、さらにそれらの項目で「特

に1番力が付いていると思う項目」を1つ選択してもらい、「その力が付いたのは、どんな場面のどのような活動で力が伸ばせたと思うか」を記述で回答してもらった。一方で「特に力を付けたいと思う項目」も1つ選び、その理由についても記述してもらった。

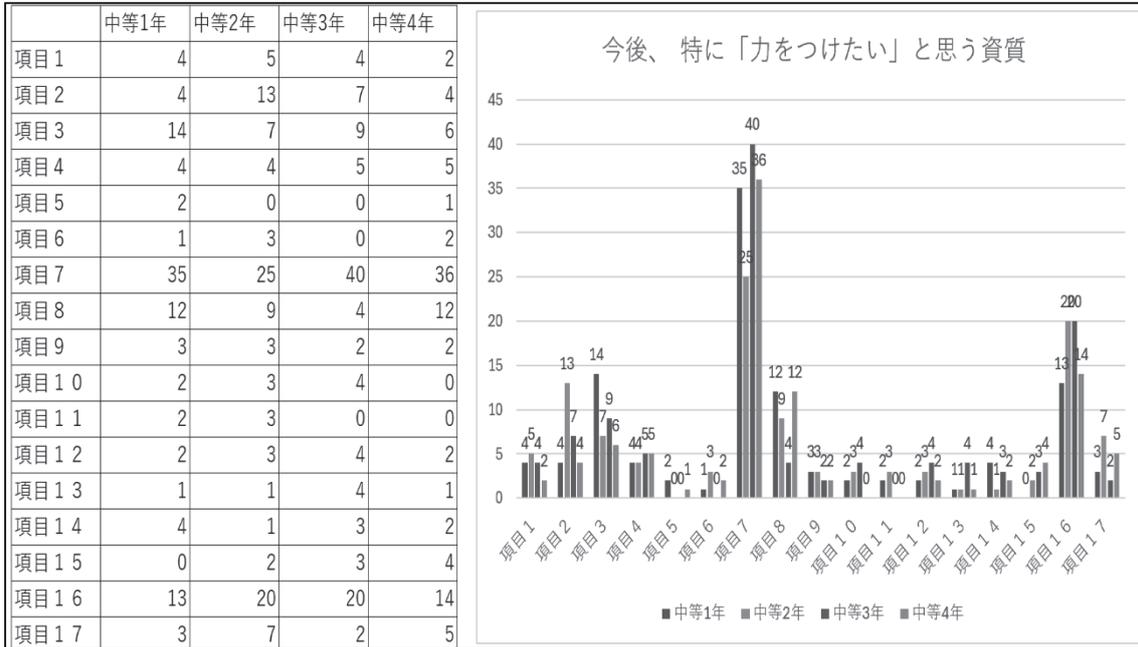
【結果と考察】

表2は、17の資質項目について、各年次ごと、4学年のデータの平均と標準偏差を集計した結果である。学年による差はあまり見られず、どの項目もほぼ同様の傾向が見られてい

表2 グローカルリーダー資質表 各学年の平均と標準偏差

	中等1年 (n=109)		中等2年 (n=110)		中等3年 (n=113)		中等4年 (n=99)		全学年 (n=435)	
	平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差
【①情報検索】 必要な情報を適切に集めることができる	3.9	0.6	3.9	0.8	4.1	0.6	4.1	0.7	4.0	0.7
【②論文の書き方】 的確な形式と文章で思考を表現できる	3.7	0.7	3.4	0.8	3.5	0.9	3.5	0.8	3.5	0.8
【③発表の仕方（プレゼンテーション）】 自分の考えを適切に発表し、共感を得ることができる	3.7	0.9	3.5	1.0	3.7	0.8	3.7	1.0	3.7	0.9
【④議論の仕方（ディベート・ディスカッション）】 多角的・実証的に議論を進め、生産的な成果を出すことができる	3.5	0.7	3.5	1.0	3.5	0.9	3.3	1.0	3.5	0.9
【⑤統計の扱い方】 収集した情報を適切に分析することができる	3.7	0.8	3.6	0.8	3.7	0.8	3.7	0.8	3.7	0.8
【⑥分析的思考力】 ものごとを筋道立てて考えることができる	3.8	0.8	3.6	1.0	3.8	0.8	3.6	0.8	3.7	0.9
【⑦多言語・コミュニケーションスキル】 母語以外の言語でコミュニケーションを図ることができる	2.7	1.1	2.9	1.0	2.9	1.2	2.9	1.2	2.8	1.1
【⑧自律的学習】 計画的に学習を進め、自分の学習を振り返ることができる	3.4	1.1	3.0	1.1	3.0	1.2	2.7	1.1	3.0	1.2
【⑨自己分析認識】 自分自身の意欲・傾向や行動を客観的に分析することができる	3.7	0.9	3.6	0.9	3.8	1.0	3.7	0.9	3.7	0.9
【⑩責任感】 自分のとった行動に責任をもつことができる（周りのせいにならない）	4.1	0.8	3.9	1.0	3.9	0.9	3.9	0.9	4.0	0.9
【⑪多様な価値観】 異なる文化や信条、価値観、習慣に対して敬意を払い、柔軟に接することができる	4.1	0.8	4.0	0.9	4.2	0.9	4.3	0.8	4.2	0.9
【⑫共感】 他者の気持ちを理解し、チームにおいて協力的な関係を創ることができる	4.1	0.7	4.0	0.9	4.1	0.8	4.1	0.8	4.1	0.8
【⑬柔軟性・適応力】 話し合いにより自分の意見を修正したり、状況により決断を変更したりすることができる	4.1	0.7	4.1	0.9	4.2	0.8	4.0	0.9	4.1	0.8
【⑭問題解決能力】 正解のない課題に対し、冷静な視点で提案し、新しいものを創り出そうとする	3.9	0.8	3.5	1.0	3.8	0.9	3.6	1.0	3.7	0.9
【⑮企画を実現させる（アントレプレナーシップ）】 自分の考えを様々な支援を受けながら現実化することができる	3.5	0.8	3.3	1.0	3.2	0.9	3.4	0.9	3.4	0.9
【⑯何事にもチャレンジ】 失敗を恐れずに何事にもチャレンジしようとする	3.5	1.1	3.3	1.2	3.4	1.1	3.1	1.1	3.3	1.1
【⑰自己効力感（I can do it）】 （課題解決に向けた）自分の信念に自信をもち、それを表現することができる	3.7	0.9	3.5	1.1	3.6	1.0	3.5	1.0	3.6	1.0

表4 17の項目のうち特に「力が付けたい」と思う資質



文化祭などの学校行事で1つのものを創り上げる経験、部活動などのチーム活動で、この資質が高められているという記述があった。⑬では、他の人の意見を聞くことで自分の考えが変わり、よりよいものになる、という記述があった。GCPの活動内容や授業での話し合い活動で、互いの意見を聞いて再考していく過程に注目し、プラスのフィードバックをしたり、必要な支援を講じたりしていけるとよいだろう。学校行事や部活動の場面においても、これらの資質が高められることを意識し、活動を支援していくとよいのではないだろうか。

(課題と捉えている意識が高い項目) ⑦多言語・コミュニケーションスキル⑧自律的学習

⑩何事にもチャレンジ

⑦では、「英語が話せたら役に立つ、世界中の人とコミュニケーションを取りたい」「GCPの授業、ALTの先生や留学生との活発なコミュニケーション、留学、など勝田中等独自の環境をもっと生かしたい」などの記述が目立った。もっと英語力を付けたいという生徒が多数いることがわかる。一方で⑦が一番身に付いていると答えた生徒の記述を見ると、上記に挙げた本校独自の環境や学習を生かしている内容が書かれていた。環境を生かしたいという生徒の意識が高いことに注目して学習意欲を高めていけるとよいだろう。⑧では、定期テストに向けて計画的に勉強できたかどうかの記述がされていた。テストに向けての取組でPDCAサイクルの学習の習慣化を支援していくことが有効ではないか。⑩では、失敗を恐れて挑戦しないことが多いという記述が多かった。失敗しても何度でも挑戦していけるように、できていることをフィードバックして勇気付けたり、改善するための気づきを促す支援をしたりして、様々なことにチャレンジしていく体験を多く積ませたい。

なお、表2で全体的に学年差がなかった結果から、今後特に身に付けてほしい資質について、ルーブリックを作成していくことも視野に入れ資質の効果的な成長を考えていきたい。

第5章 研究開発の成果と課題

1 研究開発の成果目標

申請時に提出した本事業の初年度の目標は以下のとおりである。

短期的目標（令和6年度内）

- ア DL ネットワーク内の連携校 12 校との連絡会議（DL ネットワーク推進協議会）の開催
- イ DL ネットワークの運営指導委員会の設置と 2 回の運営指導委員会の開催
- ウ 「ダイバーシティ」に関する講義の聴講に関する茨城大学との高大連携協定の締結
- エ 「ダイバーシティ」に関するワークショップを県との共催により企画・開催
- オ 連携校 12 校も含めた令和7年度からの海外留学派遣と海外留学生の受け入れの募集
- カ 海外留学派遣と海外留学生の受け入れ事務に関する連絡会議の開催
- キ 海外留学生を交えた校内高校生会議の開催

上記の短期的目標については、ウとオ以外は実際に実現し、目標を達成することができた。ウの茨城大学との先取履修に関する高大連携協定については、大学との交渉が令和6年度いっぱいだったため、実際の運用は令和7年度からになった。オについては、拠点校においては留学生派遣・受け入れの募集事務はスムーズに進んだものの、連携校においてはなかなか進まなかった。しかし、年度当初に計画していた事項については、そのほとんどに着手、あるいは実行できたことは今後2年間の方向性を定めることができたという意味で大きな成果といってもいいのではないだろうか。以下にそれぞれの目標に関連する成果と課題をまとめた。

(1) 連携校との連携（目標ア）

本事業で設置された12校の連携校が、年度当初に一同に介して連絡協議会を開き、本事業における目標や実施計画を共有した。12校には実際の取組への参加についてアンケートを実施し、およそ8校から積極的な参加の意思表示があった。学校によっては、本事業の連携を活用することでなかなか進行しない校内のグローバル教育を充実させたい、という動きもあり、本事業の趣旨が生かされた形となった。（課題）すでにグローバル教育の強化に着手した学校にとっては、本事業の取組が自校の取組と重なってしまうため、積極的に参加できないという場面もあった。また、事務局の事務連絡の文書だけでは周知が徹底しない面もあり、効率的に周知できるような工夫の必要を痛感することが多かった。

(2) 事業協働機関との連携（目標イ）

6つの事業協働機関とは、事務局と綿密に連絡を取り合い、2回の運営指導委員会以外において

も、実施内容について頻繁に連絡を取り合うことができた。また、事業協働機関全体で「ダイバーシティに関する教育を充実させることで茨城県の高校生たちのレベルをあげたい」という志を共有することができ、今後いろいろな連携ができることを期待している。（課題）3年間の事業実施後も継続できるようなネットワーク作りを進めていきたい。

(3) 「ダイバーシティ」に関する講義の先取履修（目標ウ）

茨城大学のグローバルエンゲージメントセンターの瀬尾准教授による「国際共修」の講義を県内拠点校・連携校の生徒が先取履修するための協定の締結については、県の教育委員会と茨城大学との間で進めてきたが当初の予想より時間がかかり、実際の履修は令和7年度からとなった。今後はこの先取履修について、連携校にもしっかりと周知し、多くの生徒に参加してもらいたいと考えている。

(4) 「ダイバーシティ」に関するワークショップの開催（目標エ）

事業協働機関である株式会社WTOCが県の委託を受けて、多文化共生に関するダイバーシティの基本的な知識を身に着けるための研修をオンラインで開催した。拠点校から生徒8名教員2名、連携校から生徒11名が参加した。詳細は21ページの報告をご覧ください。多文化共生の先進国であるカナダの居住者からカナダのダイバーシティ政策について英語で説明があり、その後生徒たちはひたちなか市に居住する外国人とブレイクアウトルームで英語でディスカッションを行った。日本に住む外国人の日常生活の課題について直に話すことは、日本におけるダイバーシティについて考えるきっかけとなったようだ。特に言語（日本語）が外国人にとって大きな障害になっていることを発見した生徒が多かった。（課題）カナダ人による英語での講義については理解できなかった生徒が多いようだったので、今後英語の講義については何らかのサポートが必要である。

(5) (6) 海外留学の派遣と海外留学生の受け入れ（目標オ・カ）

拠点校では、今年度（8月・1月出発）海外へ長期留学を果たした生徒は、8名であった。行先はアメリカ・カナダ・ニュージーランドである。本事業により、拠点校が連携している事業協働機関が連携校にも働きかけ、来年度出発の留学に係る説明会をオンラインで実施した。その結果、拠点校で4名が来年度長期留学に挑戦した。残念ながら連携校では0名であった。また海外からの留学生の受け入れについては、拠点校では4月～1月で3名（オランダ・オーストラリア）の留学生を受け入れ

た。事業協働機関が直接連携校に赴き説明会を実施するなどして連携校からも受け入れ希望はあったが、学校近辺のホストファミリーの確保が難しかったため実現はできなかった。(課題)潜在的には連携校においても海外留学への関心は高いと思われるが、学校ごとに周知する方法だとなかなか浸透しないようだ。

(7) 海外留学生も交えた高校生フォーラムの開催(目標キ)

令和6年12月19日に「茨城県 WWL 高校生フォーラム」を県教育委員会の主催で開催したが、実際の企画・運営は拠点校の生徒・教員が中心に行った。本校に留学中のオランダ人留学生にも、パネルディスカッション「ダイバーシティを推進するために私たちにできること」にパネリストの一人として参加してもらい、日欧の高校生に地域の外国人も加わって活発な討論を展開することができた。また聴衆として参加した拠点校の生徒の多くが、同級生が英語でディスカッションをする様子に大いに刺激を受けていた。(課題)今年度は拠点校の生徒のみでフォーラムを開催したが、来年度は連携校の生徒にも参加してもらい、茨城県全体での取り組みにする必要がある。

2 その他の研究開発の成果

(1) 先進的なカリキュラムの研究開発

茨城大学グローバルエンゲージメントセンターと連携しながら、グローバル人材の育成を念頭においた学校設定科目「チャレンジプログラム(グローバルゼミ)」において、多文化共生をテーマとした探究学習を実施した。その科目において、茨城大学の学生とともに、地域の外国人を対象とした「防災運動会」を企画・運営し、その取組が県教育委員会主催のビジネスプランコンテストで高く評価され金賞を受賞した。

(2) イノベーティブなグローバル人材像

独立行政法人大学改革支援・学位授与機構と連携しながら3年前から継続している、「グローバル人材の資質」の可視化に関する研究においては、第1回の生徒アンケートを実施することができた。その結果を職員全体で共有することで、カリキュラムマネジメントの第一歩を踏み出すことができた。

3 生徒への波及効果

(1) 海外大学進学への関心の高まり

海外からの長期留学生を受け入れることで、生徒たちは日常的に異文化に触れるようになり海外で学ぶことへの意欲が高まった。その結果、本事業の対象ではないが、勝田高校3年生から2名の海外大学進学者が出るようになった。

(2) 外国人に対する日本語教育への関心の高まり

「ダイバーシティ」に関する研修や、グローバルゼミなどの多文化共生に関する学びを通して、多くの生徒たちが、日本語教育の重要性に気付

くようになり、地域の日本語教室にボランティアとして参加するなどの自主的な活動をする生徒も出てきた。

(3) 海外での学びに対する積極性の高まり

本校の教育課程外の取組である海外語学研修はもちろん、個人的に参加する海外語学キャンプなどへの生徒の参加人数が増えた。また、海外に派遣される各種プログラムやコンテストなどに挑戦する生徒の数も増えた。

3 研究開発の課題

(1) 連携校への周知体制の見直し

海外への留学派遣や海外大学体験研修などの拠点校の事務局から周知する取組が、各連携校で周知されているのかどうかのわかりにくい場面が多かった。また、各連携校の窓口の担当者との連絡体制も確立しているとはいいがたい状況であった。今年度拠点校だけで開催した「茨城県 WWL 高校生フォーラム」は、来年度は連携校と一緒に開催する必要があることから、年度当初の連絡協議会でもっとわかりやすく説明したり、事務連絡のほかにチャットなどの連絡用システムを作ったりするなどの工夫が必要である。

(2) 研究テーマ「ダイバーシティ(多文化共生)」の深掘り

初年度は茨城大学との連携により実践的な取組が中心となったが、来年度は大学の先取り履修などを通してより学術的な指導も必要になることが予想される。文献のリサーチや論文の作成などの指導方法を教員自身が専門家から学ぶ必要がある。そのうえで、「多文化共生」のより社会的・構造的で複雑な側面を学んでいくことで、多面的で深い高度な学びを体験することができるようになると考えられる。